

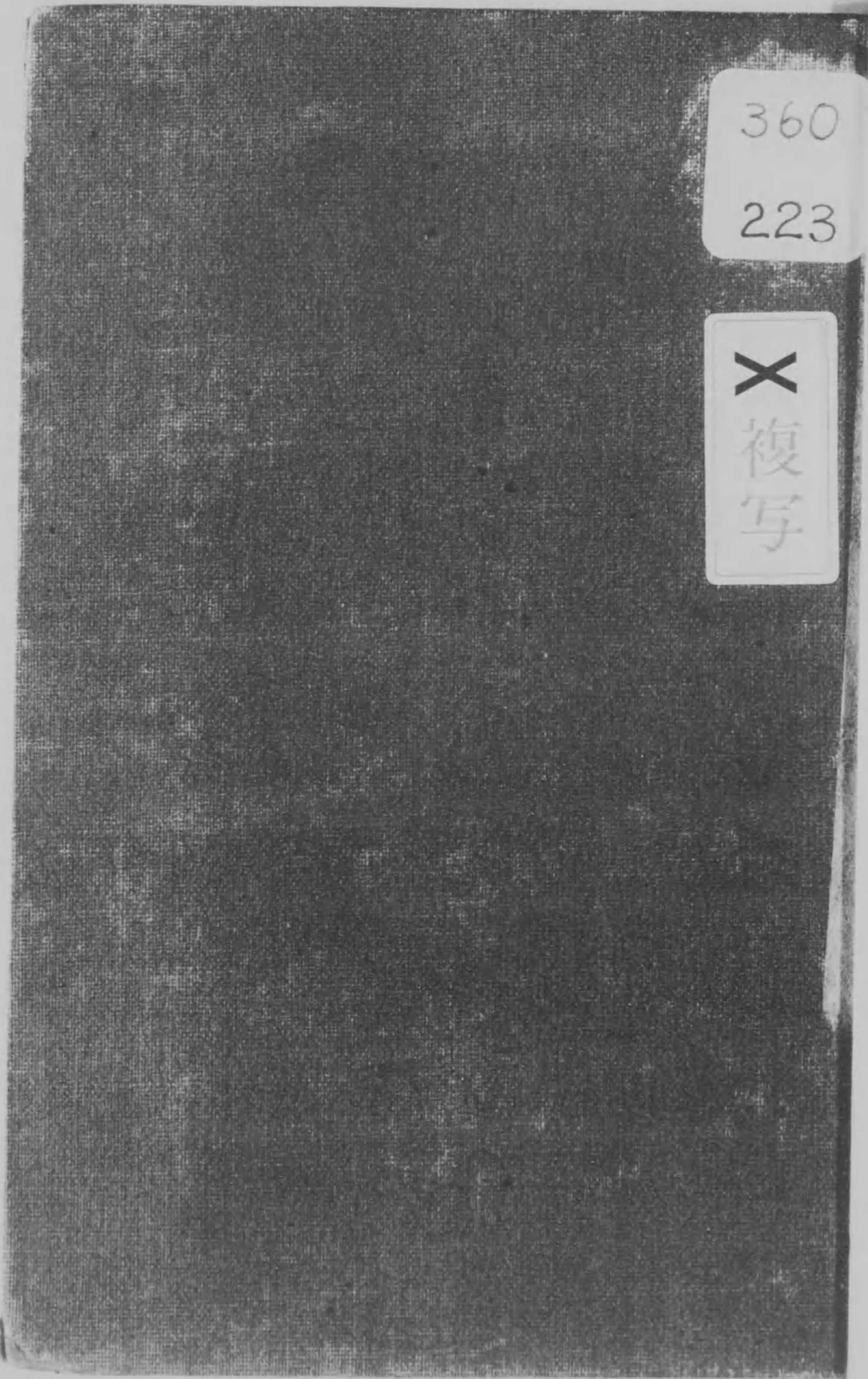
5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

360

223

X 複写

始

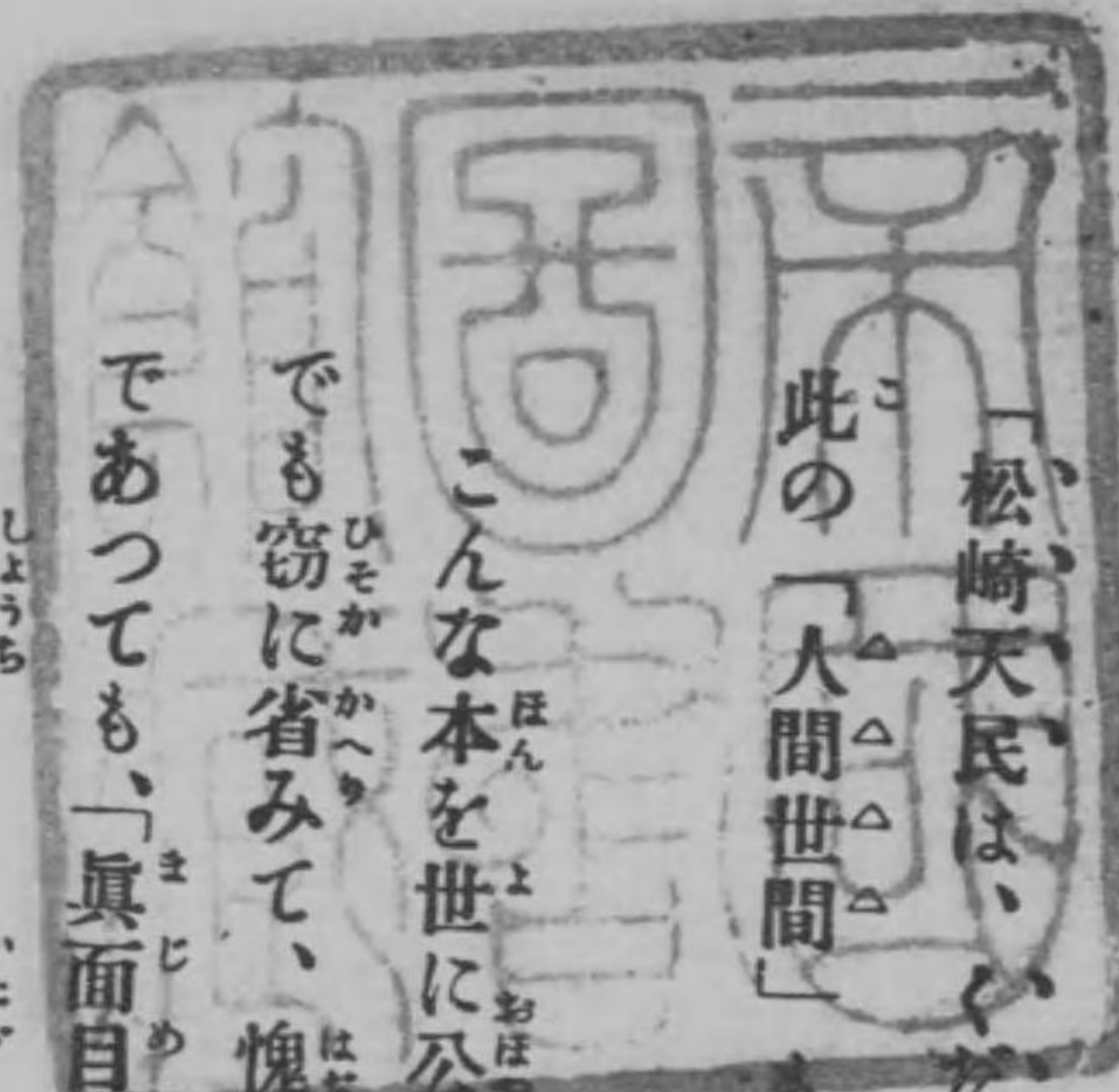


260
225



小野瀬不二入氏にさしぐ





「人間世間」の巻頭に

「松崎天民は、くだらない本ばかり出す」と笑はれるかも知れないが、此の「人間世間」も亦、實にくくだらない本である。

こんな本を世に公にしても、自他何の益するところが有るやら、自分でも窃に省みて、愧とせぬ譯ではない。唯、くだらない、詰らないものであつても、「真面目にして眞實なる生活の記録」であると思ふことだけは、承知をして頂いても宜からうと思ふ。

此の書の内容は、大正四年一月以來、雑誌「中央公論」「第三帝國」ニ



大正
4. 10. 8
内交

「雄辨」「東京評論」、及び新聞「東京毎夕」に掲げた勞作中の斷片を、たゞ漫然と集めたものに過ぎない。無學者の無學の聲に、世を驚かす響があらうとは覺えぬが、「筆硯勞働」には、忽緒ならぬ汗の滴りがある。私は其の汗の滴りの中から、「人間」と「世間」とを眺めて、此の一冊の本を作つた。

こんな詰らない本を、小野瀨不二人氏にさしあげる第一の理由は、氏が日本の新聞界に於て、新聞紙を最も科學的に研究した第一人者である事に、多大の敬意を表するためである。私が「東京朝日新聞」を辭退して、半歳の浪人生活を送つて居た時、友人渡邊利喜松、永代靜雄二兄を介して、私を「東京毎夕新聞」に入れられた高誼に對して、感謝の微意を表する

のが、其の第二の理由である。私は小野瀨氏の同情と期待とに背いて、相變らず無爲の月日を送つて居ることを、何だか申譯の無い事の様と思ふ。

私は「個人」としても、「新聞記者」としても、將來なほ大に向上しなくてはならない。僅に昔の尋常小學校四年級を卒業したのみで、「早稻田」に學ばず、「三田」に教えられず、「赤門」に入せず、新聞界稀に見る無學者である。幼い時から「人間」と「世間」の渦中に投げ込まれて、自ら働き、自ら糊し、自ら教え、自ら學びて、今日に至つたのが私の「三十八年間の生活史」であつた。

私は何も彼も「これからだ」と思つて居る。十五歳の冬、村役場の小

使部屋で、「新聞記者にならう」どの志望を立てた私は、幸にして新聞記者になることが出来た。けれども私の志望が真に完成するのは、私が六十歳になる二十何年の後であらうと思つて居る。

「松崎天民は、くだらない本ばかり出す」と罵られるかも知れないが、實はこれも修行の一つだと、心得て居るのである。

大正四年九月二十日朝 青南樹下居に於て

天 民 生

人間世間 目次

人間世間

代議士馬場孤蝶	一
徳富蘆花の近業	三
その一番のお客	五
おいところうだ	七
新聞の新年附録	八
正月三日の惨死	一〇
新浪花節生れよ	二
最も幸福な生涯	二四
松本幸四郎の顔	一七

新女優木村駒子……………一九
 大石入道の退隱……………二一
 新々演劇の創造……………二三
 中央公論の小説……………二五
 電車賃の値上げ……………二七
 親と子と現代男……………二九
 浪人生活の繁忙……………三一
 女流樂師の慘禍……………三三
 播摩屋と六代目……………三五
 三越の食堂にて……………三七
 池内萍緑を罵る……………三九
 新聞界の二潮流……………四一

正月の酒と女……………四三
 雲右衛門が来た……………四五
 奇傑宮武外骨翁……………四七
 岡山訛言の市長……………四九
 二週間の悪い夢……………五一
 漂泊の男の群に……………五三
 松井須磨子の聲……………五五
 或る友人の死顔……………五七
 活動寫真を見て……………五九
 青い酒と赤い戀……………六一
 解つたか教育屋……………六三
 女優高田の隠棲……………六四

立川の鮎の美味……………六
 極端な自我主義……………六
 「柿二つ」と「舊道」……………七〇
 文壇の不良隠語……………七二
 雲右衛門の悲哀……………七四
 田村俊子の生活……………七五
 空家を探し歩く……………七七
 大島へ流轉の女……………七九
 自殺未遂者の話……………八二
 嘉久子と龍子……………八三

山田桂華

此の頃は

一、獄裡の友加藤君……………八六
 二、金色夜叉の貫一……………九二
 三、賃借馬車で豪遊……………九六
 四、海水館の十一番……………一〇二
 五、細君虐待の狂暴……………一〇七
 六、田村江東の電話……………一一三
 七、硯海翁へ十萬圓……………一二八
 八、二十九年の生涯……………一三三

一、詩人獨歩の未亡人……………二九
 二、華麗な空氣の中に……………三三

三、恆川法學士の奥様……………一三五

四、名妓萬龍の誇あり……………一三九

五、星亨先生の未亡人……………一四二

六、十五年の春風秋雨……………一四六

七、其の後の小林孝子……………一四九

八、犠牲に爲た一年半……………一五三

九、新しい女平塚明子……………一五五

一〇、若き燕と共同生活……………一五九

一一、新々女優下山京子……………一六三

一二、繪巻物の様な半生……………一六六

一三、當年の名妓ぼん太……………一六九

一四、榮華を偲ぶ舞の袖……………一七三

一五、謎の島村抱月夫人……………一七六

一六、松井須磨子の爲に……………一七九

自殺探訪

一、閨秀畫家の自殺……………一八三

二、最初は横見幸子……………一八六

三、橋本京子の墓場……………一八九

四、今度は松尾松子……………一九二

五、女子美術の校風……………一九五

六、彼の女の過半生……………一九九

七、自殺未遂者の話……………二〇二

八、松尾松子の告白……………二〇五

九、運命を呪ふ遺書……………二〇八

一〇、自殺の眞因は何……………二二一

大島より

一、戀物語を探ねて……………二二五

二、大島の第一印象……………二二九

三、自炊生活の畫家……………二三三

四、戀の平田法學士……………二二六

五、未定稿の戀物語……………二三〇

戀の島美人の島……………二三四

自殺物語

一、何故の自殺ぞ……………二四九

二、統計の示す數……………二五三

三、今が自殺季節……………二五五

四、男と女の死態……………二五八

五、青年の大問題……………二六二

六、自殺者の運命……………二六五

七、死の瀑『華嚴』……………二六八

八、投瀑者の心持……………二七一

九、怖しき瀑の姿……………二七四

一〇、飛び込む刹那……………二七六

一一、一種の芝居氣……………二八一

一二、死時死所死道……………二八四



人間世間

松崎天民著

三國久裝幀

目次

一三、自殺の模倣性	二八七
一四、病的生活現象	二九〇
生活斷片	
青山界限印象記	二九四
巖谷小波先生に	三〇八
旅館寒燈獨不眠	三三三
漂泊の女を見る	三三六
都會夜痴男痴夢	三四九
修善寺温泉より	三五五
戀愛生活三閱月	三六三
其の後の生活味	三七二

— 目次終 —

人間世間

代議士馬場孤蝶



大正四年一月四日の新聞紙は、衆議院議員候補者として、馬場孤蝶と尾竹竹坡の名を報じた。文士と畫家が代議士になる、何だか皮肉の様な、諷刺の様な、揶揄する様な、一種の滑稽味を感じる。同時に、立候補だけでは不可い、ほんとに代議士と爲らねばいけない。衆議院議員馬場孤蝶の名刺を見たり、「代議士尾竹竹坡」の名刺を見る様にならなければ、ウンだと云ふ様な、本真劍の氣持がせぬでもない。

俺は、今の「國會」に愛想を盡かし切つて居る。俺は今の政治と云ふ

ものに、少しも共鳴を感じて居ない。新聞紙上で見た議會ばかりではない、身親しく議會に出入して、毎日、議事の経過を傍觀傍聽して居ると、ほとく愛想が盡きてしまう。嘘の政治、嘘の議會、他愛の無い議事、賣名演説、自個廣告の質問、御機嫌取の建議案、そんな事を見たり聞いたりして居ると、「代議士と云ふ者は馬鹿な者だ」と云ふ感が何よりも先に立つ。

だから代議士になる奴は馬鹿だ、ではいけない。だから代議士になるのだ、でなくてはいけない。馬場孤蝶も出るが宜い、尾竹竹坡も出るが宜い。常陸山谷右衛門も出るが宜い、高田實も出るが宜い。片岡仁左衛門も出るが宜い、桃中軒雲右衛門も出るが宜い。日比野雷風も出るが宜い、猫も杓子も出るが宜い。

世間も次第に面白くなつて來さうだ哩。

徳富蘆花の近業

暮の三十一日、新橋堂の前で肉筆の羽子板を見て居たら、畫家の大槻君が居て、自分の書いた左團次の毛刷を一枚くれた。そして新橋堂の主人野村君は、徳富蘆花氏の近業たる小説「黒い目と茶色の目」を一冊くれた。本年の讀書始めとして、俺は三日の晩にそれを讀了した。黒い目は新島襄先生で、茶色の目は初戀の女である。著者が同志社在學時代の同志社と京都を背景にして、かなり露骨に事件の経過を告白してある。横井時雄氏も出れば、徳富蘇峰先生も出る。金森通倫も出れば、新島夫人八重子も出る。人見一太郎、深井英吾、矢島楫子女

史など、編中の總體が實在の人物で、實際の事件であるだけに、徳富蘆花と云ふ一文豪の少年時代が、如何にも平凡な有の儘に描き出されて居る。俺は何よりも先づ、此の小説に依つて、新島襄と云ふ我國思想界の先覺者の一面が、赤裸々に出て居る點に、深大な興味を感じた。そして俺が九歳から十歳時代の、明治十九年二十年の頃、女子教育やらキリスト教やらが入つて、俺の生れた作州の山中でも、アーメンの祈りを聞いたり、讚美歌の聲を聞いたりした、其の頃の事を憶ひ起した。郷黨に率先してキリスト教を信じ、女子教育の急務を説いた亡母の面影が、この書の中の何處かに潜んで居る様な氣持がして、何とはなしに涙がこぼれた。

「黒い目と茶色の目」は、小説に非ず、生きた人生の記録である。

いの一 番のお客

元日ごんじつの一番ばんのお客きやく様は、十年前ねんぜんに別わかれた限りきりで、何なんの消息せうそくも無なかつた京都きょうとの吉田君よしだくんであつた。暮くれの二十八日にちに東上とうじやうして、吳服町ごふくちやうの宿屋やどやに居ゐるが、東京とうきやうで何か仕事しごとはないかと、夜逃よにげ同様にどうやうして來たきと云つて、意氣いき頗せうる悄然せうぜんとして居る。

三十七八さんじちはちにもなつて、子供こどもが五人ごにんもあるのに、女房にようばうを離縁りえんして、仕事しごとに失敗しつぱいしたと云ふ吉田君よしだくんは、縁儀えんぎの好よい元日ごんじつのお客きやく様さまではない。俺わしが京都きやうとに居た時代じだいに、少しすこしは厄介やくかいになつた家の息子おとこだが、お人好ひとよしと云ふだけの事ことで、今日こんにちまでにも二三度にならず、失敗しつぱいの歴史れきしを繰返くりかへして居る。屠蘇とそを出して先づ一杯ぱいを酌しやくむたら、吉田君よしだくんは黯然あんぜんとして、「お

「金を少し貸してくれませんか」と小さい聲で云つた。

一度は腹が立つて、撲つて遣りたい様に思つたが、話して居る内に次第に氣の毒になつて、優しい言葉をかけたくなつた。浪人して居るから金はない、有るなら此方が借りたい程の切迫詰つて居る今日此頃、不幸は二人の上と同じである由を説いた。東京に居て苦勞をするよりも、静かな京都へ歸つて、考へ直して來るが宜いと云つたら、「そしたらさうしますわ」と云つて、吉田君は淋しく笑つた。

何萬圓と云ふ資産のある家に、總領息子に生れて居ながら、何と云ふ窮迫であらう。但し吉田君の父は實父でも、母は生さぬ仲の繼母であることが、何とはなしに哀れを催した。

おいとこさうだ

二日の夜、友人S君に誘はれて、澁谷宮益坂下の小料理屋で、一酌を傾けた。蒲焼を看板にする家であつたが、鰻は到底咽喉を通らず、反つて「鳥で御酒」の方が美味かつた。银杏返しに結つた十八九の女中が居て、大にお酌をしてくれた。

その女は俺の領分内に入るべき「淪落の女」の淪落味と漂泊素の多い女であつた。フェス、ラブ、マスター、レターなど、英語交りに能く饒舌つた。「慶應義塾の本間さん、藝妓が嫌で女中が好きなのよ。妾の岡惚れ、妾好きさア」と云つて、お召に甲斐絹裏の付いた前垂れを始終氣にしながらお酌をした。隣座敷には學生が五、六人、澁谷藝妓を

呼んで、「おいとこさうだよ」を唄つて居た。

正月早々、場末の安藝妓を呼んで、おいとこさうだよを唄ひ得る男は幸福だと思つた。正月早々場末の安料理屋に上つて、變な酌婦の變な英語や變なノロケを聞かされて、六合の「富久娘」に酔ひ得ない男は、不幸福だと思つた。何の考量も、何の省察も、何の感動も忘れてしまつて、正月と云ふ新しい氣分を味はふことが出来ないのは、ほんとに「おいとこさうだよ」にも劣つた哀な男であらう。

あゝ何も彼も忘れて、叫びたい、唸りたい、噪ぎたい。天地も破れよとばかり、「おいとこさうだよ」が、唄つて見たい。

新聞の新年附録

東京朝日、國民、時事、日々、報知、萬朝、讀賣、都、毎夕と、東京の新聞は九種だけ精讀して居る。例に依つて新年の吉例とあつて、繪附録やら便覧やら、新聞社も並大抵のお骨折ではあるまい。

繪附録だけは、子供三人の部屋にして居る階下の八疊へ、それくピンで掲げさせた。國民の地味なのや、都の安石版畫みたいな物は、子供の評判が好くない。朝日の「東宮殿下」、日々の「馬上の陛下」、時事の「勝つた、勝つた」の三種だけは、兎にも角にも子供室の額面用として、一ヶ月間の壽命は有り相に見えた。

日々のは、如何にも印刷が拙劣で、畫面にも新様の匂が滲つて居ない。朝日のは「學習院」を背景に取つただけが、少しは働きてあるが、要するに子供室の物であるに過ぎない。そこへ行くと時事のは、母ら

しい氣持の好い女と、無邪氣な小兒を配して、玩具の兵隊に「勝つた、勝つた」を利かせた働きは、推賞に價する。殊に印刷の技巧は拔群の出来榮で、これを版畫として書齋の額面にするも、決して可笑しくない程度に出来て居る。新聞の新年繪附録中、毎年額面用にして良い物を提供するのは、時事新報だけである。今年の「勝つた、勝つた」も亦、時事新報が「勝つた、勝つた」である。

然し、子供等が、何時までも大切にして置きさうなのは、朝日の「學習院に於ける東宮殿下」なること勿論である。

正月三日の慘死

民間飛行家荻田氏が、京都稻荷山附近で、飛行機と共に墜落して、

助手と一緒に黒焦になつて慘死したとの新聞記事は、屠蘇に酔つて居た人々の頭腦に、深甚な悲痛の感動を與へた。俺も亦その記事を読んで思はず落涙した一人である。

大正四年に於ける最初の悲痛な出来事としてのみで無く、民間飛行家の犠牲的慘死は、武士が戦場で戦死すると同様、或はそれ以上の壮烈な最期として、我等の心臓を鼓動させる。夢の様に思つて居た飛行機は、青島の實戦に参加して以來、切實に其の戦術上に於ける功果を人心に刻み付けた今日此頃、荻田氏の死は決して無意味な凡人の終焉ではない。たとへ其の企圖は、國家が公に承認しなかつた大阪東京聯絡大飛行の豫行演習であつても、國家は特志な此の民間飛行家の死を遇するに、法律上の規定一點張であるべきではない。勳章も賜ふが

宜い、位も叙するが宜い、一時金も下されるが宜い、九段神社に合祀するも宜いと思ふ。

死時死處を誤つて、市井に徘徊して居る無爲無能の輩に、男子が快心の業と、死時死處とを教へるものは、實に此の飛行機である。曩に武石浩波を出し、今また荻田常三郎を出す。俺は第二第三の武石や荻田が出て、此の二人の様に死ぬことを、國家のためにも、個人のためにも推奨したい。

何うせ一度は、死ぬる身ではないか。

新浪花節生れよ

有樂座に吉田小奈良の浪花節を聴いて、女の唸る浪花節の厭なこと、

奈良丸節の下卑て居ることを、今更の様に痛切に感じた。浪花節は總體に行詰つて居るが、中にも奈良丸節は前途が無い。

母音を長く引張つて、強て哀音を利かせ様とする東家樂遊一派の節調にも、哀傷的な一脈の味があるのみで、同工異曲の面白味すら無い。僅に一人の樂燕あつて、雲右衛門から得た豪壯の節調を加味して、舊年末から人氣を惹いて居るが、これとても模倣の外に出るのは前途が遠い。東京のみで七百餘人の眞打があると云ふのに、浪花節の振はざること、實に今日より甚だしきは無からう。

・奈良丸はもう飽かれてしまつた。小圓は義太夫を語る様になつた。新物で賣出した若丸は材料に窮迫して居る。俺の最も崇拜する雲右衛門さへ、今は其の内容の單一なのに飽かれて、昔日の人氣が無いと云

ふではないか。俺が新浪花節花生れよと云ふのは、筑前琵琶の高峰筑風が、琵琶に浪花節を加味して失敗した様な、無謀な企圖を鼓吹するのでは爲い。材料を忠臣蔵や、國定忠治や、銀行の大賊などに限らずに、もう少し現代の生活に觸れた物を辯じ上げよと云ふのだ。

無學な浪花節藝人の中にも、少しは文字あり理解あり觀察眼ある者が居る筈である。將來の新しい浪花節は、それ等の中から生れ出て、俺等の心を慰藉してくれなくては、浪花節存在の第一義が、ノンセンスなものになつてしまふぢやないか。

最も幸福な生涯

附和雷同性が無くては、愉快に世間を渡ることが出来ないと思ふ。

附和雷同性が無くては、とても月給取の生活は出来ないと思ふ。附和雷同性が無くては、俺の人生は不幸に終りさうに思ふ。

だから、自覺は大なる苦痛で、大なる損失だと思ふ。無自覺の一生、これほど強い、これほど幸福な、これほど便利な生涯はあるまい。主義があつたり、抱負があつたり、見識があつたりしては、とても笑つて世の中を過すことは出来まい。要するに附和雷同して其の日々を送つて居る奴が、一番利巧で一番幸福な人間である。附和雷同性には個性がなく、個性が無くては自覺もない。人間の幸福は、個性を没却した無自覺の境地にある。

こんな事を、取止もなく考へる様になつたのも、浪人者の生活をして居るお蔭であると思ふ。何だか負け惜みを云つてる様で、自分でも

可笑しくなる事もあるが、斯うした理窟にも、反面の眞實はある様に思ふ。そして個性のない、無自覺な、附和雷同の生涯を送つて居る様に見えても、其の實は各自勝手の理解の上に、皆が自覺の生涯を送つて居るのだと思ふ。車夫にも、職工にも、金持にも、華族にも、分相應の自覺があつて、彼等は異口同音に、附和雷同して居るのでは無いと主張するであらう。

要するに、自覺とか無自覺とか云ふ事は、各自の反省と理解と信仰とにある。他人が彼是と言ふべき事でないかも知れない。他人からは何と云はれ、何と見られても、問題は「自分の心」如何にある。

俺にも、五分の附和雷同性があるし、また、五分の自覺がある。以て、浪人者の生活を愉快に送ることが出来やう。

松本幸四郎の顔

帝劇の一月興行を見た。子供役者が澤山出て、可愛い見えを張る「蝶千鳥恵方入船」よりも、また他愛のない「どんつく」や、「山姥」の所作事よりも、俺が最も期待して居たのは、史劇と銘打つた「家光の初恋」であつた。

須藤南翠原作、右田寅彦脚色とある五幕七場を通じて、俺の頭腦に残つたのは、家光と云ふ馬鹿殿様の面影のみであつた。昔の殿様の初恋なるものが、如何に残酷な犠牲を見るの大團圓を生じたか。考へれば考へられぬ事も無い、芝居でありながら、何の場面にも史劇らしい香氣は一つも滲つて居なかつた。散漫なダラシの無い脚色の罪もあら

うし、役者の拙いせいもあつたらうが、要するにくだらない、芝居であつたの一語に盡きて居る。

宗十郎や、梅幸や、幸四郎や、宗之助や、甚だ大雑束な云ひ様だが、あんな役者から、緊張した藝を見ようとしたのが、俺の大きな間違であつた。それに帝劇と云ふ洋風の劇場からして、第一、歌舞伎劇の氣分と相背反して居る様な心地がする。帝劇には活動寫真が調和して居る、新派劇が相應して居る、新時代劇が調和して居る、女優のダンスが一番詭へ向である様に思ふ。

たゞ一つ感心したのは、顔面扮装の巧みな役者が、新派の井上正夫の他に、松本幸四郎ある事を發見した喜悅であつた。幸四郎の扮した「家光の初戀」の天海大僧正の顔は、巧に出來て居たと思ふ。

新女優木村駒子

大變な氣焰を吐いて、觀自在宗の女神木村駒子が、月給三百圓の女優になつた。そして淺草の金龍館へ出て、曾我の家五九郎や、池内萍緑など、一所に、「復活」を演つて居ると云ふ。浮ツ調子な移り氣な、東京の好奇心を煽動するには、駒子の様な一女性の一顰一笑にも、一種の力があると見える。

讚美歌調の新しいカチューシャの歌を唄ふ聲からして、駒子は東京の女ではなかつた。舞臺上の技巧に至つては、眞面目になつて是非するだけの價値すら認める譯には行かなかつた。俺はたゞ、駒子の様な類の女が、「世間」と云ふ五月蠅い視聽の中に立ちながら、大手を振つ

て低級趣味の芝居小屋へ出た事を、大きな皮肉の様に思つて、其處に無限の快感を覚える。下山京子も女優になつた、今度は平塚雷鳥がなるか、伊藤野枝がなるか、何にしても面白い世の中である。

何うか本眞劍に遣つて貰ひたい、死身になつて遣つて貰ひたい。宗祖秀雄大明神の妻として、一方では子供を生み子供を育てながら、何處までも「女優木村駒子」として進んで欲しい。厭になつたら廢めるては、御大の五九郎どんよりも、世間と云ふものが承知しない。俺はたゝ駒子のために、觀自在宗なるものと、淺草の安芝居の女優と、何れが重く軽いかとの、天秤に掛けられた事を、神聖なる觀自在宗のために惜み、且つ悲しむものである。

駒子以て如何とす。

大石入道の退隱

同志會の領袖大石正巳入道が、突如として政界を退隱したげな。河野老人が農商務大臣に任命されると、直ぐ此の事が新聞の雜報欄を賑はした。同志會のためには大問題かも知れないが、一大石入道を失つた事が、日本國民の政治生活に、それ程大きな問題とは思へない。

底には底がある。大石の退隱の如きは、新聞でチャホヤ云はれただけだが、先づ以て退隱花の咲いたと云ふものぢや。古い奴が政治の中心になつて、カビの生えた奴が、政治を左右して居る時代は、もう宜い加減に過ぎ去つて宜い。俺は俺一人の考へから、今の政界より退隱させたい奴が澤山ある。曰く大岡育造、曰く杉田定一、曰く箕浦勝人、

曰く福井三郎、曰く藏内着炭、曰く奥繁三郎、曰く武藤金吉、曰く何
曰く何と際限が無い。

總務とか領袖とか云はれて居る連中の中にも、もう宜い加減に退隱
して然るべき男が二三人はあらう。俺等は最う古い物に倦怠を覺えて
居る。若いしつかりした奴が出なくては、日本の政治も駄目だ。若い
奴と云つても、伊東知也や、鈴木梅四郎や、有森新吉や、堀切善兵衛
などを奉らうと云ふのではない。もう少し何とかエライ奴は居ないも
のかと思ふ。

然し馬場孤蝶でも困る、尾竹竹坡でも困る、伊藤痴遊でも困る、與
謝野鐵幹でも困るではないか。

況んや坂本紅蓮洞に於てをや。

新々演劇の創造

新富座は新派劇の高田、喜多村、河合、井上、深澤、五味等の大連
で、新脚本「實花あだ花」を演じて居る。番附面に依れば、眞山青果氏
作とあるが、實は佐藤紅緑氏が口述して、新進の川村花菱氏が、新に
書下した物であると云ふ。

西洋物の「都會病」からヒントを得た物らしく、全體に涉つて従來の
新派劇的臭味から脱け様とする努力が、先づ第一に感ぜられた。どの
場面にも、これぞと云ふ舊い芝居的の見せ場がないため、多くの見物
は失望したかも知れない。然し俺は、新富座に現はれた「實花あだ花」
に依つて、行き詰つて居た従來の新派劇が、公衆劇團や近代劇などの

範圍に、進一步するの新しい一傾向を認めた。

高田にも、喜多村にも、河合にも、井上にも、甚だしきに至つては五味や、深澤にまで、舊來の新派劇とは異つた一種の科白を見る事が出来た。それが萬人の眼に見馴れた新舊演劇からは、墮落と云はれ邪路に入つたと笑はれても、俺は新派劇のためには、喜ぶべき運命の進路だと思ふ。品川の夜と寢室の二場には、殊に舊來の新演劇に見られない、新し味ある舞臺情調が漲り渡つて居た。

俺等が理想とする新々演劇の創造は、斯うして新派劇の方からも芽生えつゝある。これが完成の大功は、それ何人の手に歸すべき。新教養あり新理解ありと云はれて居る新劇團の人々も、無爲にしては過ぎまい。それ大に奮勵努力せよ。

中央公論の小説

新年號の雑誌では、先づ第一に中央公論を読んで見た。分量から云つても内容から云つても、小説欄に最も力を注いであるらしい。第一に讀んだ田山花袋の處女作脚本「大河のほとり」には、何だか欺かされた様な失望を禁じ得なかつた。

「舞鶴心中」は、徳田秋江君が書入れの大作で、久しい前から評判されたものである。作者の同情に引き入れられて、新演劇を見た時に、兎もすればこぼす様な涙を催しながら讀んでしまつて、何だか一種のアツ氣なさを感じた。それに作者が餘りに同情してしまつて、心理解剖を頭から無視して居る態度が、俺には不服の様な氣持がした。も少

し深い描寫が、男女の心持の上にあつても宜さうに思ふ。

谷崎の「お艶殺し」は、頗る面白かつた。文字ある講談師の講談速記を讀んで居る様で、興味に終始して讀む事が出来た。そこへ行くと、正宗白鳥君の「何處までも」なんかは、一人の女を持扱ひ兼て、離れ様々々としながら、何處までも引張られて行く意氣地の無い男の姿を、突き付けられた様な氣持がした。森鷗外の「山椒太夫」も、要するに、高等講談と云ふべく、上司小劍君の「兵隊の宿」では、此の作者の技巧の練達と云ふ事を、しみじみと味された。坪内逍遙の「現代男」には、諷刺と皮肉の味があつた。

俺にも、小説が書ける様な氣がする。讀んでしまつた後の感は、唯これだけであつた。

電車賃の値上げ

舊甲武線電車の値上げに就て、大分反對の聲が八釜しく聞える。鐵道院當局者にも、一應の理窟はあらうが、俺は今時に電車賃など上げて、住民の生活上に多大の打撃を與へる様な遣り方を、頗る大に其の意を得ぬものとして憤る。

政黨派の關係ではなく、唯自分一個の人格に同情されて、今の天下を握つて居る大隈伯の内閣に、斯うしたべら棒な爲政を見るのは、大隈伯のために惜い。俺は大隈内閣を以て、最も俺等の生活に近い内閣だと思つて居る。その内閣治下の爲政は、第一に國民の生活と云ふ事に重きを置かねば、殆んど存在の意義を失ふ事になる。大隈伯の内

閣に、若し俺等の生活を無視する様な施設あらんか、大隈伯も議會も糞もあつた物ではない。

政友會も、同志會も、國民黨もあつた譯の物ではない。國民の生活問題に基礎を置かぬ政黨や、内閣や、大臣や、代議士は、もう俺等に用はない。一部の電車賃値上げなど、國の大局から見れば、何でもない小事であるが、アンチ大隈熱は、何時何處から芽生えるかも知れない。電車賃の値上げが、直に影響する様な生活階級に、多くの同情者を有つて居る大隈内閣は、ほんとに考へなくては不可い。

何事も景氣が好くなつてからの事、こんな不景氣な時節に、電車賃を上げられて堪るものか。鐵道院の役人なんか相手にせず、反對運動者は、大隈伯に逢つて、膝詰の談判をする方が、埒が明かう。

親と子と現代男

有樂座で、無名會の新々演劇を見た。長田秀雄君の「親と子」と、坪内博士の「現代男」と、俺には二つながら興味があつた。帝劇連中の喜歌劇「天國と地獄」なんかは、俺などの問題にならない。

それにしても、新しい芝居の試みは、脚本の方が一歩先になつて、俳優の方が二歩も三歩も遅れて居る。老教育家に扮した東儀鐵笛にも、その子に扮した上田等にも、内から動く力と云ふものがなかつた。女優では都郷道子の妻が、相應に巧い科白を見せたのみで、内藤千代子にも、大浦雅子にも失望した。男優では中學教員に扮した大村敬が、臺詞の上に敬服すべき努力を見せて居た。

以上は「親と子」の所感であるが、「現代男」では、東儀鐵笛の若い男に、扮装上の工風を見たのみで、大分勝手が違つて居た。音羽かね子の娘にも、優れた新味を見る事が出来なかつた。俺はたゞ都郷道子と大村敬とに、何だか前途のある様な氣持がした事を、せめてもの心安めにしやう。東儀鐵笛氏などは、要するに、新劇團の舊い役者として終るべき人であらう。

小説を讀んで居ると、小説を書いて見たくなり、芝居を見て居ると芝居を演つて見たくなる。名演説を聴くと、また演説が遣りたくなるかも知れない。俺は此の頃、餘程どうかして居るらしい。

これだ、これだ。此の移り行く氣持がなくては、今の世に生きて行かれるものか。

浪人生活の繁忙

浪人をして居るけれど、閑散な様で決して無爲の月日は無い。正月に爲つてから、これはと云ふ仕事もしないが、知人には大分逢つた。知人に逢う事も、俺の今日では仕事の一つになつて居る。

茅原華山氏にも逢つた、伊井蓉峰氏にも逢つた、巖谷小波氏にも逢つた、長田秀雄氏にも逢つた。喜多村緑郎、河合武雄、佐藤紅緑、長田秋濤、秋月桂太郎、静間小次郎、國木田收二の諸家にも逢つた。今日は又、青柳有美氏にも逢つたし、赤阪林家の名妓にも逢つた。それ皆、これぞと云ふ用も無いのに、偶然何處かで逢つた人ばかり。此方から進んで逢はねばならぬ徳富蘇峰先生や、角田浩々歌客には、未

だに年首の禮もしない。

俺の様な何の力も無い浪人でも、何かの相談相手になると思つて、「何處かへ世話して下さい」と云ふ人達が、元日から今日まで三人來られた。そんな人達に逢ふ毎に、俺は何時でも自分の微力を腑甲斐なく思ふ。自分一人を何うする事も出来ない心淋しさよりは、他人のため に米一升の力にもなり得ない腑甲斐なきを恥しい事の様だに思ふ。文章 濟民の理想を捨て、兜町にでも出入して、一つ大に儲けて見たい様な 氣持がせぬでも無い。

兩國の龍攘虎搏で、大錦が勝つても、宇都宮が負けても、そんな事は俺の生活に何の刺戟ともならぬ。俺は矢張り日蔭の人達を眺めながら、俺一人の自叙傳を書いて行くのが一生の仕事であらう。

女流樂師の慘禍

自動車に轢かれて重傷を受けた者や、惨死した者は、數へ切れぬ程 あつた。けれども女流音樂家久野ひさ子が、瀕死の重傷を負うた程に、世間の視聽を惹いた事件は稀である。あの縋帶した寫真版入の廣告が新聞に出た時、俺は軽い謎を投げ掛けられた様な氣持がした。

それが音樂家久野ひさ子と判明してから、新聞紙はまた種々の成行を報じた。久野女史の風體から推察して、最初の間は醜業婦であらうと思ひ、關係者一同は其の積で待遇して居たと云ふ。それが音樂の天才だと判つた時に、關係者一同は勿論、彼の新聞記事を読んだ者は、今更の様に吃驚した。運轉手の粗忽を憎むの情と、被害者を氣の毒に

思ふ心とは、當面の事件以上に、人々を強く動かした。林病院には見舞人が引も切らず、患者は常に奇妙な魔語のみ云つて居たと云ふ事も、各新聞の雑報面を賑はした。

被害者が若し最初の推定通り、醜業を営む類の女性であつたならば、世間は何んな眼を以て、此の一件を眺めたであらう。俺は此の自動車轢傷事件が、被害者の身分、職業、地位に依つて、關係者の取扱上に二三を生じ、世間の同情心に軽重ある傾向を見て、痛烈な反感を覺えた。そしてこんな例は、どんな事件にも有る事と思つて、心から怒りたくなつた。

久野女史も氣の毒であるが、あれが醜業婦であつても、それを氣の毒に思ふ同情心に、差別があつてはならないと思ふ。

播磨屋と六代目

一月は芝居ばかり見て暮したと云つても宜い。市村座では久し振りに、吉右衛門と菊五郎を見た。青年歌舞伎の意氣、場の隅々にまで潑灑として、如何にも賑はしい、陽氣な舊芝居の氣分に觸れた。

左團次にも宗之助にも、期待すべき未來があるに違ひない。然し中村吉右衛門と尾上菊五郎とは、當代青年歌舞伎の雙壁であらう。將來の歌舞伎劇を背負つて立つ者、大阪に實川延二郎あり、東京に吉と菊の二人あり。氣の毒ながら左團次や宗之助は餘計に前途が遠い。俺は六代目よりも、中村吉右衛門の緊張性を帯びた舞臺に、より多くの興味を覺える。小宮豊隆君の尻馬に乗つて、吉ちやんを最員の引倒しに

するのでは勿論ない。

「茨木」の渡邊綱に、繪模様の極つた型を見たのみでなく、政右衛門の科白には、吉右衛門の藝の熱を見る事が出来た。吉右衛門は其の全努力を盡して、人物の表現に従事する役者である。少しの油断も安心もスキもなく、たゞ専念に舞臺を闊歩する優人である。觀察の間違や、理解の見當違ひがある場合でも、吉右衛門は其の赤熱を以て、大抵の缺點を補ひ得る俳優である。俺が最も播磨屋に取る處は、其の技藝に對する強い執着と、激しい戀愛的の態度とにある。

六代目に就ては、未だ容易に是非の見を述べ難い。吉右衛門に就ても、未だ大に研究の餘地が残つて居る。

他日を期して、俺一屋の播磨屋觀を述べやう。

三越の食堂にて

上野から銀座一丁目まで、電車に乗つて通つた時、恰度、三越呉服店の前で、正午のドンを聞いた。俄に腹が空いた様な氣持になつて、三越呉服店に入り、三階の食堂で、五十錢の晝飯を食つた。

時分柄とて、食堂は殆ど大入満員の光景であつた。辨當や、すしや、しる粉を食べて居る人達は、男よりも女が多かつた。女も世話女房よりは、貴婦人、令嬢、奥様と云ふ類の女性が多かつた。そして其の幸福らしい女性達には、自分の手腕で儲けた金で、美しい衣服を身に着け、自分の技倆で儲けた金で、欲しい物を購ひに来て居る様な、誇りがな驕慢な色が、其の一顰一笑の間にも窺はれた。

俺達の生活に近い松屋でも、白木屋でも左様であるが、殊に貴族的な三越の雰圍氣は、俺達の購買慾を刺戟する以外に、何か知ら心の底を突く。好きな物を購はうとする押へ難い慾望に反比例して、自分の財力の窮乏を自覺した時、心の底に萌すのは「不如意の哀感」である。我は顔に好きな物を購ひ得る人達の幸福に隣して、不如意の影を眺め得られるのが、こゝなるデパートメントストアである。榮華と罪惡と落魄と、この三つを並べて見せるのが、三越である。

五十錢の晝飯を食べて、五錢のコーヒを飲んで、陳列された品物には一瞥も與へずに、俺は三越の門を出た。そして勝誇つた様な勇氣と、敗北した様な卑怯とを覺えて、淋しい氣持がした。俺は未だく大に修養しなくてはいけない。

池内萍緑を罵る

新聞記者に爲つても腰が落着かず、雑誌記者になつても一所懸命になれず。今度は淺草の金龍館で、曾我の家五九郎に養はれて、木村駒子と一緒に拙い芝居を演つて居る、我が池内萍緑を罵る。

文章を書かせれば、軟派記者として相當の所は遣つて退け、芝居を演らせれば立役として、何うにか此うにか誤摩化して行けるだけの才幹を有つて居る。これが萍緑の落着かない第一因である。思ひ切つて馬鹿にもなれず、思ひ切つて眞面目にもなれず、木村駒子の相役を勤めて、僅に生活して居るのが、我が池内萍緑と云ふ一平凡人の哀れな現在の生活である。

今度「淪落の男」と題する書籍を出版するから、序文を書いてくれと云つて、昨日の早朝、俺の臥床を襲ふた。相變らず木綿の着物にセルの袴、見れば形容少しく悄然として居ながら、碌々として萍々たるの、ん氣さを現はして居る。その半生を遊蕩兒として送つた萍綠自身の自體が、やがて「淪落の男」と云ふ本になつて現はれる時、世間の一部は何んな好奇の眼を以て眺めるであらう。俺は、兎に角「何か書いて見よう」と承知して、金龍館の芝居の話などをいろいろ聞いた。

池内萍綠は、世間の問題になる程に、未だ汎く認められて居ないが、俺の生活圈内には、何時も根強い記憶を呼起す、奇怪至極なる一種の變り者である。

且つ同情し、且つ撲りたい様な男である。

新聞界の二潮流

新聞記者を勤めて居た時と、新聞社の空氣から離隔した今と、俺の新聞觀に多少の相違がある事を、此の頃しみじみと自覺した。新聞紙その物は同じであつても、見ように依つては、そこに非常な相違のある事を、近頃になつて發見した。

俺の讀んで居る新聞紙は、大阪一、地方二、東京九の十二種であるが、各紙とりづの眺めに無限の興趣がある。そして新聞記事の取材や、描寫や、編輯法などに、異つた二つの大きな潮流がある様に思ふ。

俺はこれを立體的編輯法、平面的編輯法と云ひ、また創作的描寫、寫生的描寫と云ひ、主觀的取材、客觀的取材と云ふ。説明が獨斷的であ

るが、要するに今の新聞紙製造法は、この大潮流に支配されて居る様に認めらる。

創作味の勝つた技巧的の編輯法を執つて居る新聞紙は、取材が主観的であり批評的であり、同時に立體的の氣分に勝つて居る。寫生味の多い非技巧的の編輯法を用ひて居る新聞紙は、取材が客観的であり報告的であり、同時に平面的の調子に優れて居る。何れの新聞が前者に屬し、何新聞が後者に屬するかは、容易に識別し難いにしても、少しく注意して新聞紙に對する者は、此の異つた二潮流が、新聞界に横溢して居る事を合點しやう。

今の時代に、最も閑却されて居るものは、新聞紙の研究であらう。今の時代に、最も缺けて居るものは、新聞紙に對する正しい理解と云

ふ事であらう。

正月の酒と女

大正四年一月一日から、斷然、禁酒しやうと覺悟しながら、元日早々より酒に親んだ。元日の朝を起稿日にして、この四五年來考へて居た一大勞作に着手し様と決心しながら、原稿紙十枚も脱稿する事が出来ずに、一月を過して了つた。

諸所の芝居を見た事と、酒を飲んだ事と、白粉の女に接した事と、思へば荒み切つた正月であつた。日本文字で讀んだ露西亞文學の百ページや、種の起源や、進化論や、創世紀や、百約紀や。且つ讀み且つ飲み且つ書き且つ遊びながら、「一月の追憶」は、遊蕩的氣分

み支配されて居る。そして俺の近頃の生活は、心身共に、餘に自個虐待に過ぎて居る様に思へて、一種の戦慄と、一種の恐怖と、一種の疲勞と、一種の哀愁とを覺えた。

斯うした時に、俺の心を強く鞭打つものは、三人の子供である。四月から中學校に入るべき長男と、元氣らしい顔をして居る二男と、何か知らず淋し氣に見える三男と——。彼等は常に俺の刺戟劑となり、俺の清涼劑となり、俺の反省劑となつて、俺を働かせ、俺を考へさせ、俺を眞面目に導いて居る。そして、俺は自分のために生きて居るのか、三人の子供のために生きて居るのか、と云ふ様な、生存の根本問題にまで觸らさせて居る。

考へて苦しくなると酒を飲み、思ふて悲しくなると女を見る。少く

とも過る正月の三十日間を、酒と女で暮した事が、自分には大した損失で無かつた様な氣持もする。——これではいけない。

雲右衛門が來た

浪花節の第一人者、桃中軒雲右衛門入道が來て、二月一日から本郷座で開演して居る。相變らず「村上喜劍」や「倉橋傳助」を演るさうなが、臭りかけても、鯛は依然として鯛であらう。

誰が何と云つても、浪花節界では雲右衛門が巨人である。義士銘々傳や、義烈百傑傳など、其の内容は、舊に依つて舊の如くでも、其のチャーミングな節調は、盛衰常無い東京の浪界に、必ずや一波瀾を起す事であらう。單調な奈良丸節に飽き、幼稚な東家一派を厭ふ人達は、

行いて雲入道を聴け。雲の節は、その基調を琵琶に置いて居るが、今や渾然として、雲入道一家の節調を成して居やう。

説く者あり、雲入道また昔日の面影なく、其の雄渾悲壯の調、漸く凋落に近づけるを見る、と。雲入道は人を見て法を説くだけの才氣ある男である。常に目さきを變へ、語り口を變へて、聴衆の呼吸を引摺み得る男である。久し振に本郷座へ見参した雲入道は、果して何んな戦法を以て、東京の聴衆に對せんとするか。優艶なる昔の節調を聴かせるか、莊重な今の語り口で現はれるか、俺の最も興味深く思ふのは、其の獻立の如何にある。

今度の本郷座は、雲入道にとつて、乗るか、そるかの關ヶ原である。同時に、聲音を資本に生活して居る藝人の壽命をためすべき、絶好の

一機會である。

雲入道、果して衰へたか、何うか。

奇傑宮武外骨翁

内務省警保局から、全國の選舉人に對して、選舉心得を配付したと云ふ。大浦さんが内務大臣になつて、候補者も運動屋も、神經過敏の折柄、頗る意を得た遣り方だ、と、久し振に氣に入つた。

理想選舉だとか何とか云つても、未だ大びらに投票の賣買が行はれて居る當節柄、今度こそは思ふ存分に取締つて貰ひたいものだ。大阪の奇傑宮武外骨翁が、選舉違反告發候補者の名乗を上げて、檢非違使然として現れたのも、頗る大に俺の氣に入つた。金を使つて代議士に

なる様な奴や、金を貰つて投票する様な選挙人は、我が日本國に一人も居ない様に、ドシ〜と退治せねばウソだ。

俺は司法大臣の尾崎さんと、内務大臣の大浦さんが、宜く宮武外骨翁の主旨を解して、三人者の大に協力して選挙界廓清の第一幕を開けられん事を望む。今度の御布令を讀むと、大概の候補者や選挙人は、告發され、處罰されさうである。面白い、面白い、斯うならなくてはウソだ。そして税金を拂はなくても、俺達の様な國家有用有爲の男に、當然與ふべき選挙権を與へて、俯仰天地に恥ぢざる投票をさせなくては、斷じて不可い。

俺は政友會を亡ぼしたい、國民黨を破りたい、同志會を壊したい。さうして、ウソの政黨をホントの政黨にしたい。ウソの政治をホント

の政治にしたい。

宮武外骨翁、シツカリお頼み申す。

岡山訛言の市長

坂谷市長が辭職した。電燈統一問題に就いて、責任を負ふたのだと云ふ。俺は市長と相識の間柄ではないが、同じ岡山縣の出身であると云ふ縁固以外に、坂谷さんに對しては、常に一種の敬意を表して居た。議會に於ける守屋、有森と同じく、講壇に於ける坂谷市長には、最も岡山訛が強く響いて居る。時にはこれが滑稽に聞える程、坂谷市長には郷國の音があつた。年久しく故郷を離れて居ながら、他國の言葉に同化されず、何時までも、郷國の音を有つて居るのが、俺には何と

なく懐しかつた。市長としての坂谷博士に、何んな手腕と何んな治績があつたか、そんな事は何うでも宜い。俺は唯、同じ岡山縣生れの一紳士を、「東京市長」として見る事が出来なくなつた事を、何となく惜い様に思ふ。

四の五のと云ふものゝ、坂谷博士の如き市長は、將來さう容易には得られまい。情實やら因縁やらが、いろ／＼と渦を巻いて居る「東京市政」の迷宮裡に飛込で、快刀亂麻を斷つが如き手腕を揮ひ得る市長を、此の後、得ることが出来るか、何うか。俺は坂谷市長の引責辭職を見て、東京市のために悲しむと共に、坂谷博士のためには、その時を得た所爲の様に思ふ。

兎にも角にも、俺達「東京生活者」の立場からは、市長が何うなつて

も宜い。願ふ處は、電燈料の低減である。生活費の減少である。少い金で、美味い物が食べれば、それに過ぎた仕合せはあるまい。

二週間の悪い夢

五月二十一日から病氣に罹つて、病院に入るやら、患部の切開手術を受けるやら。毎日、ガーゼの取替に、氣持悪い思ひをするやら、二週間と云ふものは、悪い夢ばかりを見て暮した。

日比谷に大芝居の幕が開いて、木挽町に巡査の垣が出来た六月三日、久し振りに娑婆と言ふものへ出て、久し振りに世間の空氣を吸つた。「未だ歩いてはいけません」と云はれて居るのに、其の日から病院へ通つて、治療を受け得るだけの身體になつた。

歌舞伎座の前には、巡査が三尺置きに立つて、疲れ切つた顔をして、群集を制して居た。内閣弾劾と云ふ時代劇に、心の波一つ動かされな
い俺も、此の大芝居の仕出し役者に使はれて居る巡査の顔を見た時
は、一種妙な氣持がした。そして、總理大臣が大隈さんで、内務大臣
が大浦さんだなど氣付いた時、一層變な氣持がした。

俺は「時代の錯誤」と云ふことを、考へずには居られなかつた。そし
て、大隈さんと大浦さんと巡査の顔とを想ひ起して、そこに一つの奇
蹟がある様な氣持がした。今の内閣も、さう長くは續くまいと云ふ様
なことが、ヒヨイと意識の表に浮かんだ。

ガーゼの交換をした傷所が、俄に又痛み出した。——俺の病氣も奇
の一つだなど思ひながら歩いた。——

漂泊の男の群に

知人の紹介状を持つたり、又は突然名刺一つで、面會を求めに来る
人が、今でも一ヶ月に三四人はある。

その人達が、何れも三十歳前後の男で、何れも職業を求めて居るこ
と、何れも新聞記者に爲りたいと云ふこと、は、判で押した様に極
つて居る。俺は誰にでも努めて面會して、努めて其の言を聽いて居る
が、それ等の人達に逢ふと、俺は何時も一種の胸苦しさと、一種の哀
感とをそゝられる。

訪問者の顔や姿や言葉の中に、俺自身の過去が見えるから、それで
苦しいのである、それで悲しいのである。忘れて居た自分自身の姿を、

眼前に突き付けられる様な氣持がして、それで俺は苦しさと、悲しさとを覚えるのである。職を求めて歩く漂泊の群、その中に自分自身の姿を見出した時、俺は慄然として自省の念に沈む。そして俺の様な、弱い貧しい男にまで、生涯の運命に就いて、或る一事を依託せねばならぬ人々の不幸に熱い涙を催す。

中には面罵痛撃して遣りたい様な、元氣潑刺たる男もあるが、多くは生活に病み疲れた敗殘者として、同情を寄せさせる。然も漂泊者の群にとつては、涙よりも金、言葉よりも飯の方が、有力なる慰藉となるべき場合が多い。さうした時に、俺は自分の貧しいことが、一つの罪である様にも思へる。

あ、俺は金持に爲らねばならない。

松井須磨子の聲

蓄音機屋が、新しい音譜を持つて来た中に、松井須磨子吹込の「ゴンドラの唄」と「ローレライの唄」があつた。「カチューシャ可愛や」で當たので、今度も、大にアテる積りであらう。

「われは知らねどわが心」のローレライの唄にも、「命短し、戀せよ少女」のゴンドラの唄にも、俺は期待した何ものも聴くことが出来なかつた。「考へて見ると、妾達がロシヤを出てから、もう半年になるのだわね」と云ふ「其の前夜」の臺詞の一節の方に、反つて松井須磨子のほんとの聲を聴いた。

俺は松井須磨子の肉聲に、淫婦の咽喉から出る聲帯の響と云ふもの

を發見した。新派の女形河合武雄の音聲に共通したアクセントには、何等の新意も無いが、唯だ其の女性特有の聲音の底に、一脈の淫蕩的情調が流れて居ることを、面白いと思つた。松井須磨子は淫婦である。少くとも淫婦的官能を有つて居る女であることは、其のチャームングな聲音が證據立て、居ることを、否定する譯には行かない。須磨子の俳優としての存在が、他の女優の群に比して、比較的強く知れ渡つたには、様々の原因があらう。けれども其の重なる原因の一つとして、俺は淫婦的聲音の力にあつた事を、閑却してはならないと思ふ。須磨子の價値はその淫婦的の聲音にのみ存する。

或る友人の死顔

東京朝日新聞記者小池信美君が、大學病院で死んだと云ふ記事を、五日の東朝に見た時、俺は愕然とした。

その前日、東京朝日の薄井君に逢つた時、俺は悪い消息ばかりを聞かされた。薄井君の令閨が入院して居る事、水野葉舟氏の亡妻の葬儀がある事、松山忠次郎君の夫人が重病の事、小池君が危篤である事など。何とはなしに俺の神經を刺戟して、厭な思ひがした。

その小池君が、死んだと云ふ記事を見た時、俺は今更の様に、「死」と云ふ事を考へずには居られなかつた。吊問に行つて、未だ生きて居る様な死顔を見た時、俺の心は「死」と隣り合せになつて居た。「どうせ一度は、俺も死ぬるのだ」と思つた時、俺は俄に一種の恐怖に襲はれた。死んだ小池君は、何の苦勞も無さ相に、安らかに眠つて居るもの

を、俺は「死」が恐かった。

弔問者の中には、久しく御無沙汰して居た須藤南翠翁も居られた。東朝の人々も四五人居て、しめやかに故人の上を語り合つて居た。同じ青山に住んで同じ社に勤めて居た小池君が、三人の幼い子達を残して、四十三歳で死んだと云ふ事實の前に對して、俺はどんなに悶がいでも、柔順な服従者でなければならぬ事を、運命の方だと感ぜずには居られなかつた。

然し、死にたくはないと思ふ。——

活動寫眞を見て

土曜日の夜、子供達を連れて、青山の青山館に、活動寫眞を見た。

芝居を見ても、寄席を聴いても、議會を傍聴しても、何一つ心を動かされない。活動寫眞を見ても、俺の心は何の樂むところなく、何の喜ぶところもない。

けれども日比谷の議會を傍觀傍聴して、一國の政治を劇的興味化するよりは、低級な活動寫眞に依つて、幼稚な娛樂に耽る方が、何だか伶俐な様な氣持がする。そして活動寫眞の西洋物と日本物とに、場面や構想や、乃至撮影上の技巧に、格別の相違がある様に、西洋の政治と日本の政治とにも、格段の相違がある事を考へた。

活動寫眞が流行して、いよゝ盛になり、興行界の各方面に擴大侵入して来たのは、様々の原因があること、思ふ。比較的安價な代價に依つて、半夜を楽しく暮し得ると云ふ様な、生活上の便利からのみでな

く、活動寫真その物の興味が、時代の趣味性と迎合したにも依らう。單り視覺に訴へるばかりでなく、今や聽覺の方面にも苦心を重ねて、あらゆる興行物の上に立たずんば、止まないと云つた風の努力が見える。活動寫真の興隆は、喜ぶべきか、悲しむべきか。兎にも角にも、活動寫真を見て感ずるのは、今の時代が活動寫真その儘の時代であると云ふ事である。

祝福すべきであらうか、呪咀すべきであらうか。

青い酒と赤い戀

俺は、此の月に入つてから、一冊の愚書を公にした。題して「青い酒と赤い戀」と云ふ。こゝでは其の自家廣告をするのではない、自己懺

悔をして、自らを憫み且つ罵りたい。

斷じて小説を書かない、小説の眞似みたいな物を書かないと、平生から主張して居ながら、俺は何時の間にか、小説家の眞似をして居た。愚書の内容は、友人Sの半生のロマンスを、有の儘に描いたに過ぎないが、その觀察や其の描寫や、其の着筆に、俺は小説の眞似をしたことを、恥しく思ふ。

俺は新聞記者である。たとへ其の筆路に、小説に似た點があつても、小説を書いてはいけない、小説の眞似をすべきではない。軟派に従事する新聞記者でも、其の筆が小説家かぶれるのは、決して喜ぶべき事ではなく、反つて邪路に落ちたものである。新聞記者の文章と小説家の文章とは、太い一線を劃さねばならぬと云ふのが、俺の十年來

の主張であり方針であつた。

その俺が、「青い酒と赤い戀」とに依つて、何時の間にか自分の主張に裏切つて居たことを、俺は腑甲斐ないと思つた。小説と新聞記事との中道を辿つて、そこに松崎天民の個性ある文章を創造することが、俺の主張であり方針であり、努力であつたものを。

あゝ俺は何時の間にか「墮落」した。

解つたか教育屋

小學校の生徒に、掃除をさせる事の可否が、俄に新聞紙上の問題になつた。また學生に體罰を課する事の是非が、新聞紙上の雜報として取扱はれた。

そして當局者の意見として、紹介されたものの中には、随分怪しからぬ議論があつた。現今の體罰を不可など、云ふ人は、寺小屋時代の風習を知らない者であるとか、今俄に學生の掃除を廢したら、使丁を増加せねばならぬとか。事の本末を誤つた意見が、然るべき位地に居る人々の間に、如何にも道理ある正しい議論であるかの様に、尤もらしい調子で唱へられた。

俺は中學一年生と、尋常三年生と、幼稚園兒と、三人の男子の父である。専門の教育上に就いては、學校の先生方に及び難い門外漢であるが、生徒の父としての意見は、人並に有つて居る筈である。そして學生の父として俺の感じて居る事柄には、世の父兄の中にも、多くの共鳴者があるに違ひない。教育を職業とする先生方よりも、學生に對

する父兄の考へは、より眞面目であり、より徹底して居る。
曰く、學生に掃除をさせてはいけない、學生に體罰を課してはいけない、たゞこれだけである。俺の子に掃除をさせず、俺の子に體罰を加へない俺の家庭に生きる俺の愛兒を、俺は労働者にしたくない、懲役人にしたくない。

借問す、教育屋ども、解つたか。

名優高田の隱棲

新演劇の大頭目で、名優の稱ある高田實は、新派の舞臺を退いて、京都の衣笠村に隱棲した。五十に間のある壯健な高田が、新派の舞臺を退いたのは、萎微振はぬ新派劇界の側面を、事實に於て證據立てた

點に、一種の消息があると共に、又一種の興味がある。

在來の完成し爛熟した歌舞伎劇と、新興の新々劇團の間に介在して、辿るべき途に迷うて居たのが、三十年の歴史ある新演劇であつた。或る者は活動寫眞の連鎖劇に落ち、或る者は淋しい田舎の町に逃れ、また或る者は新劇團に加はつて、漸く今日までは凌いで來た。然し時代の好尚から離れ、時世の興味から閑却された新派劇は、益々切迫詰つて行くのみで、やがては滅亡の他ない哀れむべき運命に囚はれた。

斯うした時に、新派劇界の大頭目であり、重鎮である高田實が、舞臺を退いて隱棲したのは、俺にいろゝの事を考へさせる。たとへ其の隱棲は、高田個人に特別の事情があつての事で、新派劇界の消長とは、何の交渉も無いにせよ、名優高田の隱棲が、新派劇の存立して行

く上に、大なる打撃で無いと云ふ一事は、悲しむべき變遷であり、痛むべき末路ではあるまいか。

伊井は何うするか、河合は何うなるか、喜多村は何を考へて居るか。

立川の鮎の美味

國民新聞八王子支局長で、俺の友人である西岡秀雄君に招かれて、半日半夜を立川の鮎漁に興じた。同行者は東京朝日の薄井、萬朝の伊藤、國民の渡邊、太田、東京毎夕の永代の諸君で、俺にとつては久しぶりの清遊であつた。

立川驛から人力車で十五六町、多摩川畔には、素朴な構への唯一軒の案内店があつた。折柄の雨後で、川水は少し濁つて居たが、それで

も鮎は相應に漁れた。釣に、網に、硝子箱に、その他いろいろの漁法もあるが、興味あるのは鵜を使つての漁であつた。網の端を握つた男が、兩岸に別れて徐々に下ると、川の中央に立た一人の男は、二羽の鵜を使ひながら、流に従つて下るのが、如何にもん氣で面白かつた。

漁つた鮎は、壽司にして美味しく、フライにして美味しく、天麩羅にして美味しく、あらひにして美味しくかつたが、然も鹽焼の美味さには及ばなかつた。殊に鮎の様な香魚を、フライや天麩羅にするのは、鮎の有する本來の味を没却するもので、愚も亦甚だしく、思はざるも亦甚だしいかなと云ひたい。

俺は夏を好むけれど、夏の暑熱を憎み、夏の情趣を愛するけれど、夏の汗には苦しむ者である。然も、この夏には、嗜み好む瓜があり、

茄子があり、鮎があるので、僅に夏の生き甲斐あることを自ら漸く慰めて居る。

極端な自我主義

舊知と新知とを問はず、俺の宅に訪ねて来られる人々の過半は、一つとして好い話を持つて来ない。金に困つて居るとか、仕事が無くて閉口して居るとか、女房を離縁しやうと思ふとか。糞ッ、松崎天民を何と思つてやがるんでイ、と云ひ度い事も度々ある。

斯う云ふ金儲けがあるが、一つ乗つて見ては何うですか、と云ふ様な問題よりも、また他人の馬鹿々々しい成功談を聞かされるよりも、俺は人達の困つた話を聞く方が好きである。俺は微力にして、人一人

を他へ周旋する事も出来ず、俺は貧乏にして、人達を助ける事が出来ないけれど、俺は得意の人に逢ふよりも、失意の人に逢ふ方が好きである。得意の人の話には、虚偽があるけれど、失意の人の物語には、人を動かすだけの眞實が籠つて居る。

そして、他人の得意な顔を見るのは愉快でも、愉快な裏面に羨望と嫉妬が伴ふに反して、失意の人に接する時は不快でも、不快の一面には、同情と憐憫の念が湧く。俺は幸福な人々に交つて、羨望と嫉妬の苦痛に悩むよりも、不幸な人々と語つて、同情と憐憫の快感を味ふことに、自己本位の安慰を求めて居る極端なる自我主義者である。

俺のみではない、すべての人々が、斯うした心持を有つて居るに違ひない、斯うした心持を知つて居るに違ひない。

「柿二つ」と「舊道」

新橋堂の主人より送られた高濱虚子氏の「柿二つ」と、恆川法學士から頂いた「舊道」とを、久し振りに再讀して見た。そして二つの異なる興味に始終して、近頃になく面白く讀んだ。

「柿二つ」は、俳壇の巨人正岡子規の死と云ふ生々しい事實を、作者の立場から描いたもので、小説を讀むと云ふ感じよりも、事實の記録を見ると云ふ氣分の方が、強くて且つ深かつた。「舊道」は、努めて小説體に記述してはあるが、一個の作品として受ける興味よりも、若い法學士恆川陽一郎君と、赤坂春本に名妓であつた萬龍とが、夫婦になる迄の事實の經過や、主人公の心持の變化の上に、多大の好奇心を惹か

れた。たゞ黒人たる虚子氏と、素人たる陽一郎氏との間に、技巧上の差異が著しく見えるのは、當然の事である。

俺は斯る事實を主とした作品、事實に興味の中心を惹く述作物は、強て小説の體を模する必要が無いと思ふ。作品そのものから受ける當面の感興よりも、作品の過去に潜む事實の方に、先づ讀者の興趣を導いて行く作物は、小説よりもつと強い、事實その儘の記録であつて欲しいと云ふ事を感じた。

この點から云ふと、徳富蘆花氏の作品も、多くは小説の假面をかむつた記録である。「柿二つ」も「舊道」も、俺はこれを小説として取扱ふことを好まない。

要するに、事實の記録は、事實の記録であつて欲しい。

文壇の不良隠語

蠣殻町に居る「淪落の女」の中に、此の程結婚した早稲田派の文士N氏に想をかけて居たK子と云ふがあるさうな。曾ては某雑誌の事務員を勤め、少しは文字を解して居るところから、盛に文壇一部に流行の隠語を使つて、お客さんを驚かして居ると云ふ。

安待合に泊して、大正藝者を招じて飲して虎した(酔ふて首振る、虎の子の意)とか。餘り腹が減じたので、シロガネスワル(銀座)で、壽司を摘したとか。近頃は長田幹彦や、近松秋江は何うして居るとか。近頃のニイキク(新聞)には、餘り面白の記事が出て居ませんねとか、嘔吐三斗に値する言葉を使つて居ると云ふ。

これは芝居に出入の文士連中から流行し初めて、一部の人々の間に盛に使はれて居る隠語である。人生感意氣とあるを、ヒトナリカンココロケと云ひ、時事新報記者を、トキコトニイシラセシルスモノなどと呼び、第三者をして理解するに苦しませて居る。この分て押して行けば、第三帝國はダイ三ツミカドクニとなり、益進會はマヌスミ何とかと呼ばれるに至らう。

愚なるK子は、文士の顔と名を知ると共に、一部文士間の斯る不良隠語を解する事を以て、唯一の光榮として居るかの様な、淺間しき女であるらしい。

何と皆さん、面白くは御座りませぬか。

何と皆さん、面白くは御座りませぬか。

雲右衛門の悲哀

久し振に桃中軒雲右衛門を聞いた。「倉橋傳助」に、「南部坂雪の別れ」に、「大高源吾」に、「村上喜剣」に、「横川勘平」に、物に依つても出来不出来があるし、その日々に依つても、多少の巧拙はある様だが、然し雲右衛門は依然として浪界の王者であり、浪花節に於ける獨歩の名人である。

雲右衛門の節は、その雄渾と莊重とが生命である。昔の様な華やかな情味と、溶ける様な艶とは、今の雲に求めて聴くことが出来ない。軽い浮く様な快さも、次第に少なくなつたけれど、其の節はいよゝゝ老熟し、その調はいよゝゝ大成した。雲の前に雲なく、雲の後に雲な

きを思はせる程に、雲右衛門の浪花節は完成したものである。たい呼吸の長いのが、雲の自慢でもあり特色でもあつたが、過る頃の大患以來、呼吸の續き方が短くなつた。奈良丸でも樂遊でも小圓でも、多くは七五調を極めて短く刻んで、二呼吸にも三呼吸にも讀て居る。けれども雲は七五又は八六調を、七五七五や七七七五に一呼吸に讀み、八六八六や八六七五と續けて一呼吸に讀む處に、他の企て及ばぬ長所があつた。他の模倣を許さぬ雲右衛門一家の長所があつた。雲も最う四十の坂を越えた。その節調は益々圓熟しても、その呼吸の續かぬ所に、老行く雲の悲哀がある。

田村俊子の生活

中央公論の大正新機運號に出た小説の中で、最初に讀だのは田村俊子の「彼女の生活」であつた。「彼女の生活」は、田村俊子自身の生活を、内面的に描寫したもので、これを一個の作品として取扱ふ以外に、一人の女性の實在の實生活として見る點に、少からぬ興味と好奇心とをそゝられた。

田村俊子はこれまでも、主として自分の生活を描き、自分の心持や感を小説として發表した。それが藝術上の作品として、何れだけの價値があるものか、それを問題とするのではない。田村とし子の様な思想——傾向、懷疑、あきらめ、自我、自己中心——を抱いて居る婦人は必ずしも稀有ではあるまい。そして俊子の作品に現れた婦人としての叫びは、やがて實世間に對する一部の婦人の叫びであると思ふ

時、俊子女史の小説は、實世間の實際問題に、初めて交渉ある一つの問題になる。

戀愛の問題からも、夫婦關係からも、舊道徳の上からも、新思想の點からも、田村俊子の生活は、研究に價する一つの問題である。單に興味と好奇心の上からでなく、今の時代に現れた一種の變體家庭としても、又は一種の奇形的夫婦としても、田村俊子の生活は、第三者の考究に價する事實である。

今の新聞紙や雑誌は、斯うした好問題と好材料を、何故に閑却して居るであらう。

空家を探し歩く

東京に来てから、今年で足掛十年になる。最初の二年は赤坂一ツ木町の圓通寺坂上に住み、後の七年餘は青山南町の五丁目と四丁目に住だ。現に四丁目二十二番地に住んでから、一年と十ヶ月になる。旅人の様な氣持で眺めて居た青山の町にも、此の頃では一種の懐しさと離れ難い情味が湧いた。

家賃十五圓から二十圓まで位で、六七室ある家に住みたいと思ひ立つて、此の五六日間を空家探しに歩いた。近所の青山から麻布、芝を歩いて、十軒ばかりの空家を見たが、氣に入つた家は一軒も無かつた。浴室が無かつたり、水道が無かつたり、風通しが悪かつたり、光線の工合が悪かつたり、何の家にも多少の不足があつた。そして今住て居る青山が好き、今住て居る家の方が好いと云ふ様な氣持が先に立つて、

移轉しやうと決した心を、兎もすれば裏切つて居ることに氣付いた。こんな弱いことではいけない、こんな未練なことではいけないと思ひながら、とうとう今の家にとまる心持になつた。家賃が安くて、眺へ向の家さへあれば、何時でも移轉しやうと云ふ心持はあつても、強て空家を探し歩く氣持になれないのは、不思議である。人間の執着性と流轉性とは、斯うした場合にも、常に一種の暗闘をして居るのではあるまいか。

大島へ流轉の女

伊豆の大島へ行く汽船の中で、酌婦に賣られて行く三人の女を見た。銀杏返しに結つた二十二三と、廂髪に結つた二十七八と十八九と。三

人とも小さな風呂敷包に、色の褪た洋傘を携へて居るばかり、足を投げ出して、「朝日」をパツパと燻らして居た姿は、如何にも流れ渡りの女らしく見えた。

船の着いた元村にも、「淪落の女」が十人ばかり居た。花月とか富士見樓とか、名前だけは立派な料理屋——と云ふよりも飲食店で、彼等は旅の人や島の若者を相手にして、極めて安價な色戀の沙汰を繰返して居た。銘仙緋の單衣も、襟には白粉垢が鼠色に附いて、頸の邊りから鼻の邊は、白粉の毒に焼けて淺黒かつた。大島節と奈良丸くづしとカチユーシヤ可愛やとは、單り彼等の唄ふ「詩歌」のみでなく、彼等の「生活」であり、彼等の「世間」であつた。

彼等の一人は、東京の生れであり、他の一人は埼玉の生れであつた。

淋しい島に渡つて、賣春婦に等しい境涯に落ちて居ながら、彼等は故郷へ歸りたくはないと云つて居た。こんな島に居て、一生を面白可笑しく暮す方が、どんなに幸福か知れないと云つて居た。不憫な者に眺めて遣つても、眺められた方は、案外にも幸福であるらしい。
女は何處へ行つても、何を爲しても、飯が食へる動物である事をしみるゝ知ることが出来た。

自殺未遂者の話

女子美術學校を出た若い閨秀畫家で、松尾まつ（一九）と云ふ娘が、毒繪具を仰いで自殺を企てたと云ふ事が、十八日の夕刊と十九日の朝刊に出た。その原因は、哲學書を読んだ結果、厭世悲觀して自殺を計

つたと云ふことを、何の新聞も普通の調子で報じた。

その自殺未遂者を病床に訪ふて、いろんな談話を交換したのは、十日の午後二時頃であつた。自殺未遂の娘は、紅い朝顔の鉢植を枕頭に置いて、四疊半の書齋に仰臥して居たが、容體は極めて軽い様子であつた。「何うして自殺する氣になつたか」と尋ねると、「矛盾と誤解との世の中です、何の快樂もない世の中です。人は遅かれ早かれ、何うせ死ぬるのですから、自分で自分を殺しても、それが自分のために幸福ならば、死んだ方がましです」と云つて、娘は蒼い顔に微笑を浮かべた。日本畫を勉強して居たが、それも詰らなくなつた。小説もいろいろ讀んだけれど、それも愚に思ふ様になつた。最近では好んで哲學書を讀んだが、系統的に研究したのではない。毒繪具を仰いだ夜には、無

数の星が死を叫いて、自分を招く様に眺められた。それで一圖に死ぬる氣になつて、毒を呑んだと云ふ。

果して此の直話の通りであるか、又は他に自殺せねばならぬ原因があつたか。要するに、當人も判るまい。

嘉久子と龍子

帝劇の女優劇を見た。大阪の松竹女優よりは、巧いと云ふだけの事で、依然として傑出した女優もなく、傑出した舞臺も見る事が出来ない。總括的に云つてしまへば、帝劇の女優も行詰りまで行つて居る。何とかしなくては、たゞ今日の儘で終るのみであらう。

悲劇物を柄とする初瀬浪子も、時代物を狙つて居るらしい河村菊枝

も、要するに木像人形に過ぎない。人氣を背負つて居た森律子も、要するにあれだけのもので、斷じて喜ぶべき前途を有つては居ない。此の三人は、比較的世間から注目されて、帝劇の代表的女優なるかの如くに遇はれて居たが、三人とも、女優としての天分と云ふものを有つて居ない。それでも拙劣な順から數へれば菊枝、浪子、律子となるが、要するに五十歩の差、百歩の異である。

僅に村田嘉久子あつて、得意の世話物に女役者としての練達と模倣とを見せて居る。これとても、天才と云ふよりは、小上手と云ふ側であるが、一頭地を抜いて居ることだけは、確實に承認して宜からう。女優の一資格たる容貌では、第二位に下つても、その天才的の藝風で、一頭地を卓越して居るのは、宇治龍子であらう。

嘉久子と龍子と、時には悪達者にまで見える事があつても、此の二人だけは、謂ふ所の舞臺に附いた女役者である。

——大正四年一月より七月まで——

泣上戸、笑上戸に怒上戸、女は所詮三枚目なり。

うたひ女に戀する勿れ、うたひ女の戀する心、うかれ心よ。

ほころびを藝妓に縫うて貰ひながら、寢ころんでふけを取る我を哀れむ。

山田桂華

一 獄裡の友加藤君

東京監獄で苦役して居る、「何百何十番」かの加藤芳吉君——
 亡友山田桂華の思ひ出を書くのに、何も獄中に居る君に宛て送らな
 くても宜い。桂華とは友人の間柄であつた高尾楓蔭君も居るし、また
 小川烟村君、井手蕉雨君も居る。東京には田村江東、小山内薫、結城
 禮一郎の諸君を初め、築地の待合花本の女將、河辰中に居た藝妓常磐
 など。數へ来れば、此の中の何人に宛て書いても適い。
 然るに僕が此の通信を、獄中に居る君に宛て送らうとするのは、如

何にも奇を好む者の様に見える。そして世間に忘れられて居る君の現
 在を、知らぬ人達にまで廣告する様で、心苦しい氣持がせぬでも無い。
 けれども、死んだ山田桂華のために、心から泣いて遣るべき人は、君
 位のものだらうと思つて、思ひ切つて君に宛て送る事にした。僕の友
 人加藤芳吉君も、今は柿色の囚衣肌寒く、兩襟に「何百何十番」の符號
 を附けられて居るかと思ふと、人知れず泣きたくなる。生れた儘の姓
 名では生きられず、「何百何十番」で生活して居る君の現在は、思へば
 電話機にも劣つて居るよ。

山田桂華の短かつた一生は、随分、數奇を極めたけれど、君の前半
 生も温順な一本道ではなかつた。學問も修養も無いけれど、人並優れ
 た世渡りの才能を有つて居ながら、君は何うして何時までも斯うなん

だらう。たとへ君が殺人を犯しても、強盗、詐欺、窃盗罪を犯しても、一度、友人として交つた情誼は、そんなこと位で忘れられるものではない。世間の多くの人は、「加藤が入獄した、えッ、そんな奴とは知らなかつた」と云つて、身震ひして愛想を盡かすのが例だ。けれども僕は「加藤が悪いのではない、加藤の罪が悪いのだ。加藤は罪を犯して入獄したけれど、僕の友人加藤芳吉は、別に友人として存在して居る」と思つて居る。僕は金も無いし力も乏しいし、君の友人として、何一つ物質上の便宜を興へる事は出来ないが、唯この變らぬ友情だけは、心から受け入れて貰ひたく思ふ。

君が未決に居た去年の秋、一家一族の大災厄で妻と妹を失ひ、君が既決囚に入つてから、僕は朝日新聞社を退いた。斯うして初めて浪

人の境涯になつて見れば、人知れの憂苦を語りもし聞いても貰ひ得る友人が、人一倍懐しく戀しくなる。君さへ此の娑婆に居て、正しい大道を濶歩して、正當な努力で正當な金を儲けて居てくれたなら、僕は何んなに心強く思ふか知れない。生れた國を同じうし、艱難の徑路を同じうしたのみで、君と僕とは殆ど凡ての場合に於て、「別な人」であつたにも拘らず、親友として交つて居たのには、絶ち難い宿命の力があつたに違ひない。去年の冬、君が獄中からくれた悔みの手紙を読んだ時、僕は聲を放つて泣いたことが忘れられない。新聞社に居た頃は其の日々の周囲に刺戟されて、心靜に考へる暇もなかつたが、浪人の今となつては、何かに付けて人懐しい念が湧いて起る。斯うして亡友「山田桂華の死」を書くに就いても、思ひ起すのは君の身の上であ

る。好んで險道を歩いて、一擧に成功し様とする君の努力を、何も悪いと云ふのではないが、險道は往々にして邪路に落ちる。願くは今度の入獄を最善の機会として、口頭のみでなく、心から眞實の修養をして來て欲しい。

齡二十九歳で死んだ山田桂華の名は、不幸にして我國の「新聞史」にも、また「演劇史」の一行すらも、埋め得る資格を有つて居ないが、我々友人の仲間だけには、何時までも其の姓名を刻み付けて置きたい。京都日出新聞の社會部長から、東京の國民新聞に轉じて、更に中央新聞記者となつた事、及び都新聞が懸賞募集した脚本に當選して「醍醐の花見」を歌舞伎座に上演した事が、山田桂華の公的生涯であつた。永久性の價値を有たない小説や脚本は、此の他に十餘篇あらうが、そ

れが山田桂華の一生に、何の力ある色彩となり、何の榮あるローマンスにならうぞ。

それにしても、「山田桂華の死」を僕が書いて、それを獄中に居る君へ宛て送らうとは、思ひ設けなんだ廻り合せである。君の死を書くべき者は、此の僕の他に無いにしても、抑も僕の死を書いてくれる者は、何處の如何なる人か。——思つても心細い。

二 金色夜叉の貫一

獄裡の友加藤君、青山の宅に居ては、子供が騒ぎ廻つたり、來客があつたりして、氣分が散漫になり勝て困る。それに少し書きたい物もあるので、三四日宿泊の豫定で、今夜この海水館に來て、洲崎に面し

た海邊の樓上に、たつた今、やつと落着いたところである。

同じ東京の市中とは云ひながら、渡船一つ渡つた新佃島東町界隈は、さながら遠い海岸にても来た様な氣持がする。今年夏は夏の初め頃、日光から中宮祠の方へ旅行したのみで、久しく旅心地に餓ゑて居たが、今夜は久しぶりに旅人らしい氣持を味ふことが出来よう。折柄の宵闇で、その上に霧が深いので、まだ眺望を盡すことは出来ないが、松青い青山から波静な海邊に來た心地は、これが同じ東京市中かと驚かれる。僕の部屋は此の前まで、横山黒頭巾の居た隣室で、二階には新進文士和氣律次郎君、階下には法科大學の吉植庄亮君などの知己が、二三人宿泊して居る。

それに不思議な事には、此の海水館は文士達の籠城地點になつて居

ると見え、以前には平田禿木、島崎藤村、小山内薫、吉井勇の諸家が居たさうな。宿の女中はお梅さんと云つて、二十五六の小柄な女だが、文士達の事は能く知つて居ると見え、「横山さんは此の部屋で、大將東郷を書かれました」とか、「島崎さんは今あの和氣さんの居らつしやる室で、春と云ふ小説を書かれました」と話して居た。それに最一つ不思議な事には、僕の居る室から廊下一つ隔てた西隣の十一番は、六疊と四疊の二室になつて居るが、亡友山田桂華夫妻は、四十一年五月から九月の中旬まで、此の十一番の室で起臥して居たさうな。山田が本郷の下宿から、海水館に轉宿した由は、其の當時承知して居たが、今端なくも其の隣室に泊り合せたのは、何かの因縁と云へやう。況んや此處で桂華の短かつた一生を思ひ、悲痛を極めた涙の最後を悼まうと

するに於てをや。

君と山田とは、餘程、前からの知り合らしいが、僕が懇意な間柄になつたのは、三十九年の秋、大阪道頓堀の角座で、素人芝居を公演した頃からであつた。井手蕉雨、高尾楓蔭の兩君を初め、同志の面々十餘名の中で、桂華は立役、君は敵役の方に廻つて居た。藝題は妹背山と露伴の「五重塔」と紅葉の「金色夜叉」であつたと氣憶して居る。君は「五重塔」の悪い遊人と、「金色夜叉」の茶店の老婆に扮し、桂華は貫一、蕉雨君は荒尾讓介に扮した。外に齋藤紫軒、中尾篤夢の兩君も居て、一座は相應に賑はしく、僕も彌治半分に、稽古の時から出入して居た。ところが二日目に貫一の出幕が迫つても、山田君は京都の新聞社の方を手引兼ねて、此の僕が俄に貫一の代役を勤める事になつた。新聞社

の方へも内所なら、平土間で見て居た妻にも無断で、僕は新俳優の何とか君に化粧して貰ひ、蒲田梅園と熱海海岸の二場を勤めた。いやもう散々の大味噲であつたが、それでも見物の片岡仁左衛門、熱海孤舟、關根默庵の諸君からは、お世辭的評判を受けた。これが山田と僕と親友になる動機で、京都へ遊びに行つた折などは、一二度、祇園のお茶屋で、御馳走になつた事などもあつた。

その頃から山田は、静間小次郎一座の脚本を書いて、先斗町で馴染を重ねた藝妓を落籍して居た。その年の暮、僕は東上して國民新聞に入り、山田も東上したいとの志望を云つて寄越した。國民新聞の結城君に紹介して、四十年の夏の初めには、國民新聞に於ける同僚としての山田を見る様になつた。山田がいよいよ脚本家にならうと決心した

のは、「醍醐の花見」が當選した頃から、何か知ら落着かず、常にソハ〜として居た。「醍醐の花見」が歌舞伎座に上演された時には、徳富蘇峰先生を初め、國民新聞の幹部達一同が見物した。その時の山田の喜悅は有頂天に達し、劇界の事、總て掌中に在りと云つた風の、當るべからざる凄じい氣焰であつた。

君も知つて居る通り、山田は背の高い瘦せた色白で、少し猫背にはなつて居たが、先づ好い男の部類であつたらう。此の宿に居る和氣律次郎君を、少し瘦せさせて背を高くしたら、何の事は無い山田桂華その儘の姿だと思へば、先づ間違はなからう。

三 賃借馬車で豪遊

獄裡の友加藤君、山田は間もなく國民新聞を退社せねばならぬ事になつて、中央新聞へ入つた。外濠線の電車の中で逢つた時、新田の水館に轉つた、好い所だよ、一度遊びに来ないか」と云つたが、思へば其の時が、山田と僕との最後の遭逢であつた。

本郷森川町の下宿に居た頃から、落籍した藝妓の細君と同棲して居たが、夫婦仲は善かつたり悪かつたりした。國民新聞社に居た頃から、一種變な咳嗽をして居たが、其の時分から肺の方にも異状があつたらしい。中央新聞に入社してからは、顧問とか主任とか云つて、文藝と社會方面の事は、自分の一存で何うにでもなるかの様に、例の調子で言ひ觸らして居た。都新聞と歌舞伎座から、不時の収入があつた上に、「新小説」に書いた拙い脚本を、川上音次郎が上演しないのにも拘らず、

百圓内外で買ったとかで、その当時の山田は、大分、贅澤を盡したらしい形跡が見えた。

結城君と山田と僕とが、築地の待合花本で遊んだ時にも、山田の眼色は世の常でなかつた。少し位の相場の高下があるのみで、押しなべて不見轉ならぬはない新橋藝妓も、河辰中と云へば「ははア」と點頭れる家の藝妓常盤を、得意然として僕に紹介した。そして「松崎君、そんちよそこ等の不見轉買は、モー宜い加減に止したら何うです。同じ何するのなら、せめて此の常盤くらゐをね……」と、如何にも僕を卑しむ様な態度であつた。「あんな妓に二三十圓も取られて、山田も随分お大盡様になつたものだ。僕なら五圓位で何して見せる」と、心竊に笑つて居たが、それでも山田には一生懸命の色沙汰であつた。「山田の様

子が變だ」とか、「山田さん、異つて居ますね」とは、山田と交る人々や、山田の出入する花本や、木挽町の割烹店みどり屋の女中達が、異口同音に取沙汰した言葉であつたが、山田は相變らず、有頂天に遊んで居たらしい。

馬車に乗つて、花本やみどり屋や、遠く吉原へ繰込んだのも、其の頃の事であつた。吉原の若い翫間へ、夏の白い半靴を買つて與へ、その尖へ赤インキで、「醍醐の花見作者、山田桂華」と書いたのを穿かせて、引手茶屋から角海老樓へ繰込んだりした。中米、河内、稻本、大文字と、その若い翫間を參謀として、大分、脚本家風を吹かせたさうで、中には「山田さん、桂華先生」と、戀こがれて居た女郎もあつたと云ふ。花本やみどり屋へ行つた時、女中が座蒲團を出し遅れたり、脇息を忘

れたりすると、御機嫌極めて斜ならず、激怒することもあつたとか。中央新聞の田村江東君や、小山内薫君と知合になつたのは、もう山田の精神状態に、異變が兆してからの事で、歌舞伎座の連中なども、變に思つて居たらしい。電車中で逢つたのが最後で、それから後の山田に就いては、僅に巷説を根據とするのみであるが、山田の生命は其の頃から、日一日と縮められて居たのであつた。其の肺も其の頭腦も、毒菌に巢はれて居るとは知らず、金の有るに任せて、今日は新橋、明日は吉原と遊び廻つた山田の面目が、眼に浮ぶ様な心地がする。今から思ふと、此の海水館に移つて來た頃が、山田桂華一代の榮華、賃借馬車で豪遊して居た最中であつたらしい。

其の頃の山田桂華と云へば、珍談の製造元かの様に取沙汰されて、

山田を知る者の間に話題となつた。馬車に乗廻して居た頃、突如として小山内薫君に電報を送り、「イマエクマテ」と驚かしたりした、山田は單り割烹店や待合ばかりでなく、知己友人の間を馬車で訪問したかつたが、其の友人の多くは生憎に、馬車を横着けすべき玄關を有つて居なかつたので、これだけは思ひ止つたとか。あゝ山田にして、今暫らく生き長らへたらんには、朝から晩まで賃借自動車に乗廻つて、都大路を我は顔に睥睨したものを、悲しいかな其の頃は、自動車も今の様に盛ではなかつた。

「山田桂華は發狂した！」山田を知る人々の間に、かうした言葉が呟き交された頃には、もう立派な發揚性妄想狂に爲つて居たらしい。哀れ世の當の態なりせば、新聞記者としても、脚本家としても、より多

く成功して居たものを、三十になるやならずで死んだ山田の生涯は、真に惨鼻の極であつた。

四 海水館の十一番

獄裡の友加藤君、今夜この海水館に来て、山田の居た隣室に座し、原稿紙に向ひ万年筆を走らせて居ると、様々な感が後から〜と湧いて起る。瑠璃窓を照す月色蒼茫として、東京灣上一波起らず、四隣たゞ寂として、涙が止め度もなく雙頬に流れ落ちる。

生々死々、無窮より無窮へ行く此の生の一角に立つて、獄裡の君を思ひ、幽明界を異にした亡友を悲しむ。殊に「旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然」と云つた様な、師走も暮に迫つた感が、何とはなしに哀

思をそゝる。山田も今まで生きて居れば、松竹専属の脚本作者位にはなつて、戀と名と金とに微笑めしたもの。何事も宿命とは云ひながら、三十にとゝかぬ若い身そらを、冷たい墓石の底に埋めたのは、何う思つても不憫である。和氣律次郎君の顔を見て居ると、山田桂華こゝに在り、それが笑つたり食つたりして居る様で、海水館の場所柄が、殊に山田を彷彿させる。

海水館に於ける山田夫妻の生活は、僅に五ヶ月内外であつたが、桂華先生の狂態は、今でも此宿の話柄に残つて居る。僕の給仕をする女中のお梅さんは、足掛七八年も此宿で居て、山田夫妻の平生は、何から何までも知り盡して居る。そのお梅さんの話に據ると、山田が海水館に移轉したのは、歌舞伎座で「醍醐の花見」を演つた翌月で、金廻りが

大分好かつた時であつた。この宿から馬車で往來した事はないが、よく方々から電話が掛つて來た中にも、河辰中の常磐からは、二日に一度位の速度で、電話の口説があつたさうな。本人が訪ねて來たのは、僅に一度だけであつたが、「あの藝妓よりは奥様の方が、小柄でしたけれど美人の様に思ひます」と、お梅さんは女だけに、今でも細君の方に同情して居る。誰にでも機嫌の好い時と悪い時とあるが、山田のはそれが激しかった様で、何うも普通の様子には見えなかつたさうである。

「毎日、新聞社の方へは出て居られました。夜分などは遅くなり勝てござんして、何時も大抵少しは酔つてお歸りでした。妾達が御部屋に入りました時は、何のお變りも見えませんが、始終御夫婦喧嘩がありました様で、奥様も大分苦勞を爲さいました御様子です。御機嫌の

好い時ですと、今日は女房さんの衣服を誂へるのだと仰有つて、能く白木屋邊へ電話をお掛けの様子でした。その代り御機嫌の悪い時は、随分手荒な事をなさいました様で、髪を振り亂した奥様が、忍び音に泣いておいでになるのを、二三度お見受けした者がありました。能くあの新聞はさみでもつて、打擲なさいました様で、細い木か竹の何ですけれど、お痛かつたことで御座いませう。山田さんは六疊の方へ、奥様は四疊の方へ寝られました。山田さんの蒲團へ、ちよいとでも奥様の身體が障りますと、直ぐ火の様にお怒りの様子でした。それでも奥様は辛抱して、洗濯物などとして居られましたが、小柄の瘦せた方です。ですから、單衣一枚を絞るだけの力も無いと仰有つて、能く御手傳をして居ました。藝妓衆だつたさうですが、好い家のお生れかして、近

所に居ました京都者の辻と云ふ車屋夫婦に向つては、爺や婆やと呼捨にされ、爺や婆やも奥様々々と深切にお世話をして居た様子です。山田が烈火の如くに嚇怒して、新聞はさみを振り廻した時、細君の逃げ場所は、何時も其の車屋夫婦の許であつた。其の細君は藝妓時代から、山田のためには随分苦勞をして、痴話口説の限りを盡した戀仲であつた。その細君のためには、女の子まで生ました他の女と別れて、いろ／＼無理な算段をして、漸との思ひで落籍したとも聞いて居る。さうして女は何處までも、山田のためには苦勞を厭ひはしなかつたに、山田の方から秋風吹かせて、出て行けがしに苛責んで居た。戀に苦勞の昔を思へば、どうして斯んな事が出来やう。山田は其の頃から、戀仲の愛妻に對してさへ、正氣の沙汰では無いのであつた。

それでも宿の者に對しては、平生と少しも異ならず、たゞ電話を掛ける時や、立關を出入の時には、時々妙な事があつたと云ふ。若し其の頃、君や僕が遊びに行つて、變な様子を看破したなら、何とか治療の方法も講じたものを、思へば可愛相な事をしてしまつた。

五 細君虐待の狂暴

獄裡の友加藤君、山田は名と金のために狂うて死し、君は女と金のために、一再ならず獄裡の人と爲つた。たゞこゝに平々凡々、何の爲す無き一人の僕あつて、旅に似た此の宿で、山田と君の上を思ふて嘆く。これが僕の生活で、これが僕の事業であらう。

海水館に居た四十一年は、山田が二十八歳で、細君も二十八歳の同

い年であつた。山田は脚本と金とに狂うて、魂魄有頂天外に浮かれて居たが、それでも細君に對しては、人知れぬ苦勞があつたらしい。人目忍んで逢ふ瀬を樂しむた戀仲は昔の夢、腸窒扶斯を二度も病んでからは、嬌艶を誇つて居た鴨西の一美妓も、氣抜けがした様な女になつた。「京都へ歸らせやう、別れやう、手を切らう」と、山田の方では其の氣になつても、細君の方が承知しなかつたらしい。山田夫妻のいささつは、僕よりも君の方が詳しい筈だが、何にしても氣の毒なは、細君の身の上であつた。

本郷の下宿に居た頃、僕も一度逢つた事があるが、京都式の世話女房然として、左袂を取つて居た女には、何うしても見られなかつた。山田は能く口癖の様に「うちの女房は馬鹿で困る」と云つて居たが、海

水館の女中に向つても、「おかみさんは馬鹿なんだよ」を、繰返して居たさうな。山田自身の考へでは、細君を京都へ歸らせた後、河辰中の常磐を何とかして、三人目の細君にしたかつたのかも知れない。可愛い女の子まで生ませながら、今の細君の藝妓時代に迷い込んで、前の女に別れた程の山田だもの、二度目の細君を捨て、別れて、三人目の常磐に迷ふたのも、決して不思議な事ではない。細君を多く取換へた方では、山田よりも君が先輩らしいが、藝妓を藝妓として眺める事の出来ない君達の心が、僕は可笑しくて堪らない。古い疊を取換へる様に、新しい妻から妻へと移り行く君達の不眞面目を、僕は衷心から憤慨せずには居られない。

山田の細君虐待は、海水館に於て最も其の慘酷を極めた。海邊は風

通しが良くて、夏は水のように涼しいが、蚊の出る事も一通りではなく、蚊帳が無くては一夜も過されまい。然るに、愚劣な脚本の當選に慢心し、また其の愚劣なる脚本の上場に増長した山田は、金廻りが少し良いので物狂はしくなり、淺間しくも天下の大脚本作家を以て任じ、其の細君に強要するに、天下の大家の妻たる資格を以てした。もとより正氣の沙汰ならねば、眞面目に憤慨するでもないが、山田は蚊の出る一夏を、唯我獨尊とたゞ一人、廣い蚊帳の中に納まり返つて、細君は斷じて蚊帳の中に入るを許さなかつた。お前は文豪の妻君たるべき資格がないから、京都へ歸りさへすれば宜いのだよ。お前は僕の女中なんだから、蚊帳の中なんかに入らなくても宜い」とばかり、狂人とは云ひながら、憎むべき我意を通した。お可愛相に奥様は、夜通し蚊を

殺すので寢られはしません。朝起きて行つて見ると、半紙一二枚の上に蚊の死體が、眞黒になつて並んで居るのですもの、随分だと思ひましたわ」と、今でもお梅さんは憤つて居る。それで居て機嫌の好い時には、白木屋松屋へ細君の衣服を注文したのだから、何うしても正氣の沙汰ではなく、文豪桂華先生の所爲であつた。

「築地の待合花本から、山田さんへ御病氣の見舞として、鶏卵を澤山持つて来たことが御座いました。其の時山田さんは非常の御立腹で、こんな物を持つて来て、勘定を拂はせ様とするのは怪からん。すぐ持つて行つて歸して来いと仰しやるので、持つて行つた事が御座いました。宿では別にお氣が變だとは氣付きませず、一風變つた妙な御方だ位に思つて居ましたが、後で小山内様から承りまして、其の頃から

少し狂つておいでになつた事が判りました。氣でも何うかしておいでにならねば、奥様を蚊責めになどはねえ」と、お梅さんの同情は、今でも細君の方へ深い傾向が見える。

斯うして、海水館に居た九月中旬までは、山田の肺と頭腦とがいよ／＼險惡に陥る初期であつたらしい。それから本郷の下宿に轉じて、京都へ歸る其の日まで、中央新聞記者であつたさうで、此の間には我黨の好漢田村江東翁なども介在して、隨時隨所に諸種の珍談や奇談を演じたらしい形跡がある。

六 田村江東の電話

獄裡の友加藤君、東京に於ける山田桂華の狂態は、これで大團圓の

幕を閉づべき時が来た。其の當時は山田が京都へ歸つた事も知らず、歸つてからも何うして暮して居る事やら、何事も知らずに過して居たが、東京を出發した後の山田の運命は、底知れぬ死の谷へ、非常な勢で急轉直下したのであつた。

山田が東京を出發した前後の事情は、田村江東翁が最も詳しく知つて居る筈である。僕は今その江東翁に電話を掛けて、「山田桂華の死」を書いたために、山田の下宿して居た新佃島の海水館に来て居ると知らせた。そして東京出發當時の模様を、詳しく話してくれと云ふと、江東翁は「それは好い思ひつきだ、亡友のため是非大に書いて遣つてくれ」として、詳しい事柄を電話してくれた。金と名と女のために狂ふた、小心な山田桂華の面目が、活躍して居ると共に、哀しい痛ましい人生の

影が、色濃く滌ふて居るではないか。以下は田村江東翁の電話の聴取書である。――

「俺はこんな暢氣な男だけれど、山田桂華の死に就いては、常に人知れず萬斛の涙を濺いで居るよ。東京を發したのは、何年の何月であつたか、月日は確と覚えて居ないが、出發前後の模様だけは、誰よりも俺が最も詳しく知つて居る筈だ。抑も國民を出た時に俺の所へ来て、中央新聞へ入れてくれと云ふから、俺も役に立つ男だと思つて、社會部で働いて貰ふことにした。今から思ふと其の時分から少々變だつたので、何うも平記者では困るから、何か好い名前をくれと云ふ山田の請求であつた。然らば社會部主事と云ふことにしやう、それが宜からうと戲談半分に承知すると、山田先生大に恭悦して、中央新聞社會部

主事と云ふ名刺を振り廻し、田村江東などは私の部下に使つて居る、と云ふ様な調子であつた。例の脚本一件で、少々金廻りの良かつた時だから、先生、遊びもしたし浮れもしたし、なか／＼當るべからざる大景氣であつたらしいよ。

その内に山田は、友達仲間を大に驚かして遣りたいが、何んな事をしたら宜いだらう、と俺に相談した。さうだね、友人一同を招待して、一大宴會を開くのも面白いが、其奴は費用が嵩んで困るだらう。今ならば自動車と云ふ所だが、其の頃のことだから、何うだい一つ馬車に乗廻して見ては……、一日五六圓で済むことだし、頗る妙だらうと答へると、山田先生手を拍つて喜んだ。二頭立の借馬車で、翌日の一
番に訪問したのが、斯く申す俺の宅さ。おい參謀長の所へ來たつて、

誰が驚くものか、それよりも他の友人の所へ行つて、大に威張つて遣り給へと云つて、其の日は無事に追返した。後で聞くと山田は俺の宅を出ると、直ぐ長谷川天溪君の宅を訪問して、これから博文館へ出勤しやうとする處へ坐り込んで、正午過ぎまで大氣焔を吐いたさうだ。二頭立の馬車で御入來なんだから、長谷川君の宅の者も驚いたらうし、天溪君も亦氣が變だとは知らないから、餘ほど面喰つたに違ひない。天民の宅へも行きたいし、蕉雨の所へも行きたいが、みんな馬車の通らぬ狭い通りに住んで居るから、折角の名案も駄目だなど、云つて居た。社の仕事も少しはして居たが、何しろ正氣の沙汰でないのだから、俺も當り障らず、好い加減に遇つて居た。

さうかうして居る内に、山田は故郷の京都へ錦を飾つて歸りたいが、

汽車賃を拂ふのは何だから、一等のバスは無いかと云ふ。恰度俺が持合した一等乗車券があつたので、何の氣もなく貸して遣ると、先生その晩は大得意で、みどり屋から花本へ行つて泊り、翌夕馬車で新橋驛へ馳せ付けたものだ。一等の寢臺車に大家然と構へて、故郷へ錦は宜かつたけれども、同室の柳澤伯か柳原伯かを捉へて、盛に氣焔を吐くなど、大分亢奮の度が激しかったらしい。馬車もバスも俺の入智慧なので、世間では俺が山田を發狂させたなど、怪しからんことを云ふ連中がある様だが……

田村江東翁の電話は、以上で終つたのではない。生れて初めて一等の寢臺車に納り返つた山田桂華は、其の夜から正真正銘の精神病者になつて、様々の悲喜劇を演じた。東京から京都へ、錦を飾るために歸

つた山田の生涯にも、いよゝ大詰の涙の幕が開いた。

七 硯海翁へ十萬圓

獄裡の友加藤君、それから後の事は、人生慘鼻の極、何うして涙な
くて語ることが出来やうぞ。田村江東翁の電話は例の調子で、自ら嘲
ける様な口つきで、其の後の發展を語つたが、其の短い電話の中にも、
山田桂華の晩年が、映畫の様に活躍して見えた。

「さう早く出發し様とは思はなかつたが、恰度、山田が一等寢臺車に
乗つた深夜、當時の中央新聞社長大岡育造翁から、俺の許へ二三度の
急使があつた。萬籟寂たる深夜に何の急用かと聞くと、驚くではない
か君、汽車中の山田桂華から大岡社長へ宛て、三通の至急電報が來て

居るのだ。最初の一通は沼津邊からで、「ダイジケンアリ、キン一マン
エン、スグオクレ」、次は濱松邊からで、「セイジジョウユ、シキダイジ
アリ、五マンエンスグデンカワセオクレ」、最後のは名古屋からで、「セ
イジモンダイオコル、キン一〇マンエン、スグオクレ」と云ふ、何が
何やら判らない大騒ぎなんだ。

大岡社長は何の事か判らないから、俺の所へ問合されたのだが、深
夜に三度も至急電報で、然も一萬圓から五萬圓、五萬圓から十萬圓な
んだから、大概の人は面喰つてしまう。東京でこんな騒ぎをして居た
時、汽車中の山田は益々發展して、僕は斯う云ふ者ですとばかり、借
物の一等乗車券を、同室の人々に示したから堪らない。京都驛へ着く
や否や、借用バスの一件が発覺して、七條驛頭一大狂亂の一幕が演ぜ

られた。その前から山田は、京都府廳と三條小橋の萬屋旅館へ、「ムカヒノバシヤダセ」との電報を發してあるので、七條へ着けば、必ず出迎して居るものと極めて居た。然るに着いて見ると馬車はなくて、反つて改札の驛夫から、「このバスは貴君のではない、鐵道規則違反です」と極め付けられたので、忽ち怒氣心頭に發して、「天下の大家山田桂華を知らぬか」とばかり、初めて發揚性躁狂の本體を現はして四邊構はず暴れ廻つたのである。

馬車で出迎へよと云ふ電報を見て、京都府廳では不思議に思ふし、萬屋旅館は山田を知つて居るが、何かの戲談だらう位に思つて、番頭一人が出迎へたのみであつた。こゝに於てか山田たるもの、大に面目を損ねたとあつて、持合せた五圓紙幣十圓紙幣を、居合す赤帽や車夫

へ撒いて與へる。巡查に向つては、京都府廳の不都合を憤る、萬屋の番頭に向つては、馬車が來て居ないので怒り出す、全く手の下し様が無かつたと云ふ。兎に角、萬屋の番頭一人で始末を付けて、宿へ連れ込んだのは宜かつたが、納まらないのは山田である。先づ在京都の舊友へはがきを飛ばして、僕が歸つたのに何故伺候せぬかと責め、果は一人でノコノと京都府廳へ出かけた。警察部の保安課長を捉へては、舊の日出新聞社會部長、今の脚本作家たる山田桂華が歸つたのに、何故、京都府はこれを歓迎せぬかと論判した。それでも宿に居た頃は、主人の岡本橋仙君に向つて、文藝壇の趨勢を是非したり、演劇改良論を上下した位で、大した狂暴の風はなかつたさうだ。それから後の事に就いては、俺に無關係だから知らないが、随分いろ／＼迷惑して居

ても、不憫なものだとは思つて居る。一度、亡友山田のために、追悼の桂華會でも開いて遣らうではないか。や、失敬、失敬！

田村江東翁の電話は、これだけであつたが、京都に於ける山田桂華は、なか／＼これだけでは濟まなかつた。小橋際の萬屋別荘に滞在した一ヶ月の間は、山田の肺病と脳病とが、同じ程度に猛進した時、一日と衰へ行く様が、眼にも頬にも著しかつたと云ふ。先妻の生んだ女の子があるだけで、引取つて世話する程の親戚もなかつた爲め、哀れや文豪たるべかりし山田桂華は、行旅病人に等しい其筋の保護を受けて、先づ洛外の岩倉精神病院に收容された。思へば山田が故郷へ飾つた錦と云ふのは、鐘に櫻の物狂ひ、胸の血汐に彩つた二十九年の生命であつた。

去年、十五年振に歸省の途次、大阪へ立ち寄つた時、舊友吉田笠雨君から、山田桂華の石碑を建てやうではないかと相談された。そして岩倉病院から大學病院に轉じたことや、末期の水は高尾楓蔭君がとつたことや、臨終の模様などを聞いた。語る笠雨も、聞く僕も、その時はただ面白さうに、且つ笑ひ且つ興じつ。

八 二十九年の生涯

獄裡の友加藤君、山田の斷末魔が近づくと共に、僕の此の通信も、次第に終局に近づいて來た。山田が京都へ行つてからの詳しい事は、生憎と誰からも聞く機會がなくて、今日まで打過ぎて居たので、最期の幕は吉田笠雨君の談話に、根據を置くの他はあるまい。

岩倉病院に收容された山田は、發揚性躁狂の特色を發揮して、日々夜々暴れ狂つて居たさうな。一人一室の躁狂室に監禁されて、戸を叩き床を踏み、手を曲げ足を上げて狂ひ廻つた山田の様子が、眼に見えらる様ではないか。大聲に怒鳴つたり、笑つたり泣いたりするかと思へば、自分の糞便を攫んで投げたりする躁狂者の姿を、山田その儘だと思へば宜からう。曾ては道頓堀角座の舞臺で、戀に悶えの間貫一に扮して、非技巧な藝風に喝采された山田桂華！。その成の果が狂人であると思ふ時、誰か運命の惡戯の冷酷無慘なるに、驚嘆し、戰慄し、慟哭せざるものぞ。

精神病の方が次第に鎮靜して、岩倉病院の朝な夕な、山田の思ひ出が我に復つた時、肺の方は更に重症に陥つて居た。知己友人の世話に

依つて、瘦せ衰へた山田の體軀を、京都大學病院の一室に横へた時、既に死の色は濃く其の全身を襲うて居た。高尾楓蔭君が見舞に行つた時、僕も馬鹿であつた、何うして氣が狂つたのやら、不思議で堪らない。肺の方が全快したら、大に眞面目な昔に復つて、勉強したいと思つて居る」と語つたさうな。命旦夕に迫つて居ながら、死の近きを自覺することが出來ず、死ぬるまで全快した後の樂しさを想ふて居るのは、肺病患者に見る稀有の實例である。國木田獨歩でも、平尾不孤でも、山下雨花でも、永井定太郎でも、田中稻月でも、渡邊亮輔でも、容易に其の死を信じて居なかつた。我が山田桂華も亦、瀕死の床に横はりながら、全快した後の樂しさを夢現に描いて、たゞ生の執着にのみ微笑むて居たらしい。

けれども明治四十二年、生を此の世に享けること二十九歳にして、山田桂華の一生は終焉の幕を閉じた。歴史の何れの部門に於ても、一行の存在さへ認められない平凡人の一生にしては、真に多趣多様でないか。山田が此の世に遺した事業は、たゞ一人の女の子であつても、それが何の恥辱にならうぞ。山田に虐待された細君の心にも、淺からぬ契を結んだ常磐の思ひ出にも、みどり屋の女中や花本の女將が昔語りにも、山田は生きて残つて居やう。況んや山田と親交ありし君や僕や、多くの友人の心の底には、生きてもの云ふ山田の念が残つて居る、廣い世間の多くの人々からは忘れ去られても、狭い仲間の少い友人に忘れられず、何か知ら常に一脈の哀思をそつて居るのが、平凡人の死である。殊に世の常ならぬ病を得て、行路に悩む漂泊人にも似た

一生を、短命にして果た山田の如きは、極めて稀な「死の趣致」を傳へてくれた恩人である。山田自身にしても、普通の病氣で普通に死ぬるよりは、あつした波瀾の一幕を演じて死んだ方が、何の位戲曲的で宜いか知れないと思つて居るであらう。山田が世に遺した述作物には、何等の藝術味が無かつたにしても、其の「死」は天才的であり、藝術家的であり、また韻文的であつたと云へやう。

あゝ親友山田桂華逝いて六年、新聞はさみで打擲されて居た細君や、明けて九歳か十歳位になる忘れ形見は、何處に何うして居るであらう。何時か松本樓の宴會で、僕の前に坐つた藝妓が、頻に山田の事を尋ねて居たが、それが河辰中の常磐だと氣付いた時には、もう何處かへ住み換へして居た。花本の女將は相變らず浮き名を謳はれて居るし、み

どり屋で山田を知つて居たお鶴さんは、天賞堂の裏に待合を開業した。たゞ新佃島の海水館にのみ、依然たる當年のお梅さんが居て、時折、山田夫妻の事を想ひ起しては、細君の安否や如何にと氣遣ふて居る。さらば、東京監獄で苦役して居る、「何百何十番」かの加藤芳吉君、明くれば大正四年、亡友山田桂華の七周忌までには、君も出獄するであらう。もう好い加減に懺悔し改心して、桂華の石碑を建立する時には、君も是非その連名の中に加はつて欲しい。それが何よりも、亡友山田桂華への適い手向ではないか。――

——大正三、十二、五、夜——

此頃の

詩人獨歩の未亡人

月日の経つのは真に早いもので、國木田獨歩さんが、湘南茅ヶ崎の南湖院で、血を吐いて死んでから、此の六月二十三日が、恰も其の八周忌になります。尾崎紅葉一派の硯友社の小説が、文章本位で勢力を領めて居た頃に、『運命論者』や『牛肉と馬鈴薯』などの傑作を公にして、一味の新聲を傳へたのが、國木田獨歩さんでしたが、未だ四十歳になるやならずの若さで、死なれました。私が此頃は何うお暮しですかの第一人目にお訪ねしたのは、其の國木田獨歩未亡人治子の方で、お

目に掛つた場所は、日本第一のデパートメントストア、三越呉服店は、三階休憩室の一隅でありました。獨歩未亡人は三十七歳になられたさうですが、何ちらかと申せば中柄の肥つた方で、心持蒼白いお顔に金縁の近眼鏡を掛けて、廂に結つて、薄いセルか何かの單衣を召して居られる姿は、心からか淋し相で、何となく窶れて見えしました。三越の様な華やかな陽氣な舞臺に、色彩美しい友仙模様や、金銀寶玉の類を背景にして、相應に科白のある登場俳優になつて居ながら、治子さんの一顰一笑には、如何にも未亡人らしい匂が漂つて居ました。

『獨歩が死にましてから、此月で八年目、妾が三越に入りましたから、もう五年になりますもの、御覽の通り何時の間にか齡を老つて、色も香も無い姥櫻のお婆さんに爲つてしまひました。唯今は小石川の水道端

町に住んで、毎日朝は八時から、夜は六時半頃まで、お店の方に詰めて居ますので、何一つ書かうと云ふ心持にもなりません。長女の貞ちゃんは大久保の方へ參つて居ますが、もう十六歳になりましたから、何かと心配いたして居ます。宅の方は中學に通つて居る虎雄と、二女のみどりと婆やと妾との四人暮して、「運命」や「獨歩傑作集」など、縮刷物の印税も少しは入りますが、何を申しても生活向の方に追はれ勝て、青山の獨歩の墓も、まだ蘇峰先生に書いて頂いた木標の儘なので、一時は小説を書いて、其の方面に生きやうかと考へた事もありましたが、第一そんな暇がない上に、落着いて述作しやうと云ふ様な氣分には、容易になれるもので御座いませぬ。それに他の方がお書きになつた新しい書物は、評論でも小説でもそれを拜見する毎に、何だか及

び易からぬ様な心持がしまして、今では筆を執ると云ふことは、諦めてしまはうかと考へて居ます。三越の女店員の一人として、當代の婦人風俗とか、流行の變遷とか申す事も、少しは觀察せぬでも無いのですが、餘りお饒舌をいたしますと、お店の方から叱られますから、萬事御遠慮いたしませう」と、治子さんは淋しく微笑まれました。

華麗な空氣の中に

國木田獨歩未亡人治子さんと、三階の休憩室でお話して居る處へ、ニコ／＼笑ひながら、入つて來られたのは、同じ店の廣告部長濱田四郎さんでした。今から五年前、治子さんが三越呉服店へ入つて、休憩室に勤める女給仕の取締になられた時、一二の新聞紙は面白がつて、

いろんな事を傳へたものです。中にも獨歩の未亡人が、三越呉服店に入つたのは、店の日比翁助氏が、文士の遺族に同情された結果だなどと、如何にも感心な事柄の様に、傳へたものがありました。當時、日比翁助さんは此の噂を非常に迷惑がつて、三越ともあるものが、文士の遺族に同情するのなら、何も朝は八時から夜は六時過ぎまで、他の店員と同じ様に働いて貰ふ必要はない。毎月三十圓なり四十圓なりの包み金を、無條件で仕送るのなら、同情とも云へるが、働いて貰つて金を拂ふのは、同情で無いのみならず、第一、文士に對して失禮な申分であると云つて、其の誤聞である由を解かれました。濱田さんは此の思ひ出話をしながら、店では千五百人からの店員を使つて居ながら、婦人は僅に六十名に過ぎぬ事や、外國のデパートメントストアで

は、主として女店員を使つて居ることなどを語られました。一概に女店員と申しても、其の事務の性質や、賣る品物の種類で、女店員では駄目な仕事もあるし、女店員では應接の出来ない場合もあります。米國紐育のオートマンと云へば、世界でも有数のデパートメントストアですが、重に呉服類を販賣して居ながら、多く男の店員を使つて居る様な例も有るさうです。それに女の店員は、折角事務に馴れて來ても、結婚と云ふ關門がありますので、給料は安くても、小廻りは利いても、美しくても、勤続年限が短くて、ホンの腰掛半分と云ふ缺點がある様です。そこへ行きますと獨歩未亡人の如きは、殘る半生を『三越の女』として送られ得るだけの『不幸な幸福』を有つて居る方だ、と云ふ事が出來ませう。三越には獨歩未亡人の他に、寫眞部には小林文學士の未亡

人が居ますし、また嫁して人妻に爲つて居る方も、四五人は勤めて居られる様です。さうした婦人達が、三越と云ふ華やかな空氣の中に、何の苦勞も無さ相に、他人の榮華を眺めて暮して居るところに、私は苦しい生活の陰影を観ました。別れて歸る時、『あなたの現在の生活を、其のまゝ小説にお書きになつては何うです』と申しましたら、獨歩未亡人は笑ひながら、『え、何か書きたい』とは思つて居るのですが、何うしても書けないのですよ。こんな事なら、獨歩に教はつて置けば宜かつたのに、ね』と云つて眼鏡を拭はれました。

恆川法學士の奥様

青山穂田の大山公爵邸裏手に、瀟洒な居を構へて居られる、法學士

恆川陽一郎君をお訪ねしたと申すのは、表面のテレ隠してして、實は夫人静子の方に爲られた赤坂春本の名妓萬龍さんをお訪ねしたので御座います。萬龍と夫婦に爲るとか爲れぬとか云つて、陽一郎君が大駄々をコネて、實家を飛出して居られた頃には、能く日吉町のカフェー、プランタン邊りて、お目に掛つたものですが、其頃は陽一郎君も未だ法科大學生でしたのに、只今では濃い髭を生して、押しも押されぬ立派な紳士になりました。足掛三年振りにお目に掛つたのですから、驚きはそれからそれへと盡さず、殊に萬龍と夫婦に爲られた顛末を、自ら説に書いて出版された『舊道』に就いては、いろ／＼と面白い話がありました。そこへお貧盆を持つて、冷した麥湯を持つて、冷たいシトロンを持つて、昔の名妓美人萬龍今の夫人静子の方が、しづく

と入つて來られて、小笠原流の手つきも優艶に、初對面の挨拶をなさいました。水色が、つた荒い堅縞の縮みか何かの單衣に、白地へ藍色の模様ある羽二重の片側帯を、丸鬘に結つた鬢の毛が一筋も亂れて居ない、地味好みの質素なキチンとしたお姿は、少し老けて三四に見えますけれど、未だ午の二十二ださうで御座います。お夫婦は瘦せて高い恆川君、小柄で低い萬龍様、如何にも不似合の様ですけれど、二十八歳の陽一郎君には、青春の氣が漲つて、二人で並んで坐つて居られる姿は、宛然お雛様を眺める様な心地が致しました。『今から十年前、既に有名であつたのですから、二十四か五位には思つて居ましたよ』と申しますと、静子夫人は微笑ながら『十歳の春から半玉に出ましたもの、名前だけは早くから廣まりました、文藝倶楽部の美人投票

が十二歳の時にありました位ですわ」と、氣も心も輕さうな物の云ひ振りが、何となく無邪氣に聞えました。箱根の洪水で恆川さんと知合になつたのが十七の夏で、世間晴れて祝言したのが、一昨年の二十歳の二月、まだ寒い冬の最中でありました。生きるの死ぬるのと大騒ぎした戀仲ですもの、陽一郎君に取つては、世界に二人とない戀女房の、可愛からぬ筈はなく、散歩や芝居見物は、何時も鴛鴦の夫婦連が、若い男女の羨望の的になると云ふことです。朝湯日化粧の藝妓の群から、一足飛に山の手の法學士夫人と爲つたけれど、當年教坊に艶名を轟かせた第一人者の面影は、今も尙その黒髮に、その眸に、その唇に、その福よかなる鼻にも残つて、一顰一笑の表情には、法學士恆川氏陽一郎の君が、半生の熱い血汐を傾けられた色香の匂ひが致しました。

名妓萬龍の誇あり

十歳の春から半玉に出て、思へば夢の様な十年間を、浮いた世界に送つた靜子夫人は、僅に手紙が書けましたばかり、女の道に大切な裁縫のお仕事は、少しも御存知でなかつたのが、今はまア何と云ふ可憐の女房振りで御座いませう。お慈悲深い陽一郎君の母上が、三國一のお嫁にとて丹精を凝らされたにも依りますが、十年の歲月を色香の巷に送つても、藝妓の悪風に染ず、常に無邪氣な娘心で送つて居た心掛が良かった爲に、今では自分の衣服は愚か、夫の君の他所行も不斷着も、お針の運びがお速いさうです。春本の萬龍は日本一の美人と囃され、藝妓繪はがきの先驅となつて、日本全國の津々浦々は申すに及ばず、

遠く海の彼方にまで艶名を馳せながら、華やかな思ひ出を過ぎ來し方の夢と観じて、恆川夫人と爲られたところに、平凡ならぬ名妓萬龍の價あり、名妓萬龍の誇りありとも見られませう。夫婦に爲つて足掛三年、一度も廂になどは結つたことが無く、新橋のお千代さんに丸鬘ばかりを結はせて居たが、今では近所の髮結さんが三日目に一度来て、たゞこればかりは女の命の黒髪が、兎もすれば脱け勝なのを、たつた一つの苦勞の種にして居られます。萬龍時代の美しさは、もとより其の奥面にありましたが、他に一つ頭の毛髪が多くて濃く、房々として美しいのが、評判になつて居ましたのに、盲腸炎を八度も病み、強い薬を服てからは、秋でもないのに脱毛したのが、何よりも涙であつたさうです。陽一郎君は「髪なんか脱けない方が宜いけれど、脱けたつて

構はないや」と心に止めず、暇あれば讀み書きの道を授けられたので、今は手蹟も拙からず。折々の春の花見や秋の月見に胸迫る、切ない思ひは人知れず、三十一文字に寄て、若夫婦の戀の歌に興じ合ふこともありますとか。静子夫人は『尾崎紅葉さんの小説が、一番判り宜くて好きですわ』と云はれましたが、恆川陽一郎君は法學士でも、『舊道』と云ふ小説を著し得る程の新人だけに、夫人に對しても氣輕にさばけて、當代の新しい小説を勧められます。殊に武者小路實篤さんの小説は、まだ幼稚なところも有るが、眞面目な所が氣に入つたとて、「お目出度き人」や、「世間知らず」などを、『努めてお讀みよ』とお讀ませになり、後で自分の意見を加へて、陽一郎君獨得の『細君教育』をされたか。其の面影には萬龍時代の色香が漂つて居ましても、静子さ

んは二十二歳で、立派な奥様に完成されて、三度々々のお膳立から、
 濯ぎ洗濯針仕事、お客様の應接も、多くは女中の手を使はず、平和に
 して幸福な、此の頃を送つて居られます。

星亨先生の未亡人

星亨先生が東京市役所の一室で、伊庭想太郎の兇刃に斃れなさいま
 してから、月日の経つは真に早いもので、此六月二十一日が恰も其十五
 年忌になりました。味方も有れば敵も有りましたけれど、星亨にして
 今この世に在らしめば、日本の政界を二分して、其の一に覇者たるの
 壯觀を極めたでせうに、實に惜いことをしたものです。政黨政治の消
 長など云ふ事には、全然門外漢の私も、麻布仲之町の邸に、星亨氏の

未亡人をお訪ねしました利那には、さすがに種々の感慨が胸に迫りま
 した。門を入つて二十歩、正面玄關を上つた左手の、二十疊敷もある
 廣い客室に通されました時、先づ眼に入りましたのは、先帝兩陛下の
 尊影に次いで、乃木將軍や、西洋の風景畫などの中に、生ける人の様
 に架つて居た星亨先生のお寫真でありました。一杯の冷い麥湯に咽喉
 を潤して、廣いお庭に咲いた杜鵑花や、菖蒲の美しさを眺めて居ますと
 ころへ、未亡人は、薄い鐵お納戸色の縮緬に、三ツ紋の附いた羽織
 を召して、出てこられました。お髪を無造作に束ねて、何ちらかと申
 せば小柄の瘦せた姿は、瀟洒に見えましたが、人懐かしい眉や眼許の
 間には、先生を失はれてから十五年間、雄々しい中にも女の手一つで、
 淋しい月日を送られました苦勞の影が、色濃く漾つて居る様にお見受

けしました。お嬢様は京都の石坂法學博士に嫁がれ、家には中央大學生の令息光さんと、數名の召使が居ますのみで、物音一つするでなく、風薫る廣い座敷も、心から秋の様に、何となく淋しい氣持が致しました。『主人が亡くなりましたのは五十二歳で、妾が四十三歳、光が十歳で御座いましたが、十五年の月日は瞬く間に過ぎてしまつて、宛然夢見る様な心地が致します。毎年、宅の方でも佛事を営みますが、池上本門寺でも、舊友會の方々が發起されまして、毎年、盛大な追悼會を営まれますので、故人も定めて草葉の蔭から喜んで居ることかと存じます。主人が不慮の最期を遂げました當時は、恰も此の頃の様に、俄に暑氣が厳しくて、四五日前から氣分が悪いくくと申して居ましたが、それでも六月十七日には宇都宮へ參つて、訴訟上の用向きを片附

ました後、十九日の夕方歸宅いたしました。其の頃は内幸町の方から赤坂新坂町に移つて、一年半ほど過ぎて居ましたが、新坂の家は御承知の通り大久保卿の住まはれた洋館でして、日本室が無いのが何より不便で御座いました。そこで芝山内に有つた別莊風の家を購ひまして、新坂へ引く事に致し、地面に繩張をして技師に設計をさせ、製圖も殆んど出来上りました日が、恰度主人の殺されました六月二十一日でありました。俄の變事に一家は上を下への大騒ぎでして、普請どころの事ではなく、其後一年半ほど新坂に住んで居ましたが、外國から歸られた渡邊専次郎さんにお譲り致す事になり、山内の家は唯今の所へ引いて參りまして、今年で十三年も住んで居るので御座います」と、十五年の昔にかへつた未亡人の思ひ出を、冷い風が涼しく吹きました。

十五年の春風秋雨

星亨未亡人の思ひ出は、遠く十五年前の今月今日に飛んで、長い歲月の隔たりも、また今更の様に新しい愁を誘ふかと怪しまれました。廣い客室を飾る青磁の花瓶や、黒檀の卓子などにも、故人が世に在りし日の充實せる生活の名残が、色濃く滲ふて居る氣に見えて、何となく侘しい氣持が致しました。其日々々の生計に瘦せる様な、不如意な御身分では有りませんが、主人亡き後の淋しい家に、二人の愛子を擁して、風雨十五年の孤獨を守られた苦節に至つては、お察し申すだに涙の種でありませう。お庭に盛る菖蒲の花は、薄紫色に匂ふても、血を吐くかどぞ疑はれる杜鵑花の色の一片にこそ、未亡人が人知れぬ

涙の數々が潜んでゐませう。前にも申しました通り、主人が殺されました六月二十一日は、恰度今日の様に暑さの厳しい天候で御座いました。政友會の本部に寄つて、それから市役所へ行くと申して、午前十時頃に人力車で宅を出かけました。芝の政友會本部で原敬さんと御面會いたし、用談が済みましてからは、何でも將棋を致したさうで、市役所へ参りましたのは、晝餐後であつたかと記憶いたします。碁よりも將棋の方に趣味を有ちまして、平生は多忙くて、そんな暇も御座いませんでしたが、避暑へでも参りますと、讀書に倦いた折々は、來訪者を相手に能く將棋をさして居ました。市役所では其の日、三階で秘密會があると申して居ましたから、歸宅は夜になる事とせうと思つて居ますところへ、恰度午後三時頃に市役所から電話がかゝつて参り

まして、『先生がお怪我をなさいました』と申すのです。妾は餘り突然の事でしたから、急いで電話口へ出ますと『お怪我、お突かれになりました、胸部を、大變です……』と云ふ大騒ぎなので御座います。妾は取敢ず宅の者を大急ぎで市役所へ遣はし、後から直ぐ参りますと、もう血に染つて絶命して居まして、何とも手當の致し様が御座いませんでした。大概は洋服を着て出掛けましたが、其の日は暑いからと申して、紺の單衣に絹の袴、絹の五紋の羽織を着て出掛けましたので、思へば六月二十一日の午前十時頃が、夫婦父子一世の別れて御座いました。遺骸を宅に連れ戻りましたのは、其の日の午後六時半頃でしたが、當時はもう何うして宜いやら、悴の光は十歳の頑是盛り、泣くより他には詮術が無くて、途方に暮れてしまひました。たゞ今ではもう

人を恨まず、何事も運命だと諦めて居ますものゝ、それでも政治上の消息などを、新聞で拜見します時折には、若し壯健で星亨が世に在らば、世間の誤解を解くのみで無く、まだ〜いろいろな事業も致しませんでした。たてせうにと、女氣の愚痴が出る事も御座いました……』と赫く様な夏の白日でも、未亡人の思ひ出は、秋の空かと打濕りて、袖に袂に時雨降りました。春風秋雨こゝに十五年、池上本門寺畔に眠ります故人の墳墓は苔淺けれど、香煙今もなほ縷々として絶えませぬのは、先生が世に在りし日の面影に、慕ひ寄る人々が、君の靈を現在に還せと、且つ願ひ且つ祈る憂國の煙でせう。

其の後の小林孝子

彼の女は何うしたらうー若い遊び盛りの男が二三人、カフェーか何かへ落合つて、青い酒や赤い酒で微酔の気分になりますと、各自の思ひ出は、過ぎし月日の遭逢に還つて、能く『彼の男は何うしたらう』とか、『彼の女は何うしたらう』とか云ふ様な事が、其の場の興味ある話題になるものです。それは強ち自分と直接の關係が有つた人には限らず、時折の新聞紙上で問題に爲つた問題の女性性が、其の後は何うして居るであらうと云ふ事が、何とは無しに好奇心を動かしたり、興味をそつたりする様な例は、誰しも経験の有る事でせう。伯爵田中光顯の愛妻となつて、岩淵の別荘に、若い女の微笑を洩らして居た小林孝子さんも、其の當時は新聞紙上の問題になつて、兎角の評判を傳へられました。縁は異なるもの味なものとやら、今年の二月、白粉の香艶

に濛ふ柳橋は、龜清の前に柳水館の看板を掲げて居る、寫眞師蒔田實さんの妻に爲つてからは、久しく消息を聞きませんでした。『彼の女も細君になつて、波瀾の多かつた前半生に、一先づ黒幕を下ろしたね』と云ふがあれば、『問題の女もとうとう平凡な女の行く道を辿つて、平凡な世話女房になつたのか』と云ふもあつて、『小林孝子』の四字は、今や人々の記憶から遠ざかつて、寫眞屋の細君に爲つた孝子の細君振り、僅に想像して見られる位に過ぎなくなりました。依然として問題の女として、浮き名を謳はれるのが幸福か、嫁して人妻と爲つて、忘れ去られてしまふのが不幸か、孝子さんにとつては、果して何れが眞の幸福やら、聞きたいのは其のお心持です。美しい藝妓衆の寫眞が、何枚となく飾られて居る柳水館の一室で、初めてお目にかつた孝子

さんは、既に當年の小林孝子で無く、黒髪匂ふ丸鬘姿のキチンと取すました細君振りでしたが、それでも何處やらに未だ若々しい『未婚女』らしい面影が漲つて居ました。縮か何かの鼠色が、つた豎縞の單衣に、羽二重か何かの薄色の帯を締めて、スラリと立つた姿には、世の苦勞を知らぬ女の幸福らしい風情さへ見えて、先づ感じたのは『これが當年の小林孝子か』と云ふ、欺された様な一種のアツ氣なさでした。女子師範を卒業し、十九の春に伯爵家は、『岩淵の田中さんの方へ上る筈でしたが、其の當時から八釜しく新聞に書き立てられました、何かと問題の女にされてしまひました。二十二歳で田中伯爵家へ参り、一年半ほど暮りましたが、妾一人の虚榮心か何ぞの様に、新聞や雑誌には書かれますし、世間の評判にはなりますし、彼の當時は全く何うして宜いやら、困つてしまひました』と語り初めました。

犠牲に爲た一年半

椅子に腰かけた小林孝子さんは、兩の手を膝の上のせて、言葉少につ、まじやかに、過ぎ來し方の夢を繰返しました。『妾の口から申しましては、何だか言譯がましく聞えまして、心苦しう御座いますが、何も自分一人の淺ましい虚榮心から、田中家へ参つたのでは御座いません。そこには種々と云ふに云はれぬ事情がありました、謂は心ならずも、一種の犠牲と爲つて、田中伯爵家に一年半を送ることに爲つたので御座います。揚靜太郎さんとの事件に就きましても、いろ／＼と誤解もされましたし。有らぬ噂も立られました、何も彼も妾の不

徳の致すところと、諦めて居るので御座います」と語り續ける孝子さんは、顔色一つ動かさず、眞面目に構て居られる中にも、さすがに莞爾に微笑しました。両親も有れば兄弟もあつて、自分の父の様な老伯爵の妻に爲らねば、生活が出来ぬと言ふ様な、不如意な家でも貧乏な方でもないに、若い女の行くべき道の第一歩を踏み過つた爲めに、斯うした誤解を受けたと云ふ心持は、其の一顰一笑の間にも窺はれました。

「當家へ参りましてからは、初めて世間の目や耳から遠ざかりました様で、何の苦勞も無い月日を送ることが出来る様になりました。寫眞の仕事は女でも出来るから、寫眞撮影の技師に爲つては何うかと、主人から毎度勸められて居るのですが、何うしたものかと未だ考へ中なので御座います。芝居は歌舞伎の方が好きですが、近頃は餘り見物い

たしませず、小説は近頃の新しい作家の新しい作物を、好んで拜見して居ますが、鏡花さんのなども興味が深い様に思ひます」と、孝子さんの談話振りは、何處までも遠慮勝に聞えました。蒔田實さんと結婚したのは、結婚見合の寫眞を柳水館で撮影した時、蒔田さんの方から懸想して、孝子さんの前半生にあつた種々の波瀾は承知の上で、夫婦に爲られたとの評判があります。そして孝子さんや其の近親の人達を、今でも悪者視して居る人々の間には、蒔田さんと孝子さんが結婚したのは、双方に野心があつての事で、何うせ續いたところで、一年か一年半だらうと取沙汰して居る者もあります。中には蒔田の父が金持で、銀行の重役を勤めて居るところから、孝子の背後に付いて、今まで孝子を操つて居た或男が、強て夫婦にしたのだなど、いろん

な噂も有りますけれど、孝子さんは兎にも角にも、大丸齧の細君に成つてしまひました。主人の蒔田實さんが二十六歳で、孝子さんは一十年長の二十七歳と云へば、今が女盛りの運の定まり時、願はくば此の夫婦の上に、神の祝福永久にあれ。

新しい女平塚明子

四谷の寄席喜吉の前を突當つて、右へ曲つた右側は南伊賀町四十一番地の一構へ、門の中には三四軒の平屋建があつて、其の一軒に『平塚、奥村』と、小さく並べて書いた標札の出で居る家が、當代に於ける新しい女のオーソリチー、雷鳥平塚明子女史のお住居です。古い格子戸をガラリと開けて、『御免下さい』と呼びますと、ハイと答へて出で

来たは、荒い格子縞の浴衣に細い帯を締めた一人の女性、髪を無造作に束ねて背のスラリとした態度恰好が、何うやら雷鳥女史らしくお見受けしました。『どうぞ此方へ』と招ぜられて、玄關を上つた左手の室に入りますと、そこは八疊の書齋兼客室らしく、箆筒に鏡に机に本箱に、奥村博畫伯の描いた風景畫や、博さんと雷鳥さんの肖像畫が、先づ注意を惹きました。隣室は六疊か四疊半か、そこには共同生活の若き燕、青年洋畫家奥村博さんが、何か爲て居られる様な氣配でしたが、やがて『入らつしやいまし』と叮嚀に挨拶されたは、取次に出た浴衣の女で、當の平塚明子女史でありました。新しい女の機關雜誌「青踏」に書かれた思想問題、婦人問題、文藝評論などを拜見しますと、如何にも男性化した方の様ですが、明子女史にも女としての優しさと、微笑とはあ

りました。『昨年さくねんの十月じゅうがつから上總かづさの御宿ごじゆくへ行つて、今年ことしの正月しょうがつ七草ななぐさに東京とうきょうへ歸り、小石川こいしかはの方に住すんで居をりまして、四谷よつや邊あたへ來こやうとは夢ゆめにも思おもひませんでした。此この角かどの山田やまださんへ、佛蘭西フランド語ごの研究けんきゆうに參まゐつて居をます關係くわんけいから、十日じゅうにちほど前まへに引越ひきこしまして、此この頃ころ漸やく落着おちいたところところです』と語かたり出だされた明子あきこ女史にょしの話はなし振ぶりは、氣き取とらず、振ふらず、周章しゅうていず、はにかまず、しとやかに言こと葉は少すくく、少すくしも無駄むだが無く、落着おちいて、世よに謂いふ新あらしい女おんなの中なかでも、平塚ひらつか明子あきこ女史にょしは最もも要領えうりやうを得えて居をる一人ひとりであることが判わかりました。『青踏せいふの方は經營けいえい上の關係くわんけいを絶たちまして、専せんら伊藤いとう野枝のえさんが編輯へんしんして居をられますが、千部せんぶ内外ないがいの賣行うりやうでは、なか／＼困難こんなんで御座ございます。妾めかけはこれまで主しゆとして評論ひやうろんを書かき、『圓窓まるまどより』は發賣はつばい禁止きんしになりましたが、『現代げんだいと婦人ふじんの生活せいかつ』は、青踏せいふ

に書かいた物ものを集あつめましたので、これだけは何どうやら、發賣はつばい禁止きんしを免まれて、少すこしは賣うれました様子やうすです。たゞ今いまはエレンケ―の物ものを翻譯ほんやくして居をます他に、生うまれて初はじめての小説せうせつ「峠たがひ」を書かいて居をますが、未まだ半はん分ぶんにも達たつしませんので、何どの位くらゐの長篇ちやうへんになるか、少すこしも見當けんたうが付きません。氣きが乗のりますと晝ひるも夜よるも書かきますが、矢張やはり夜分やぶんの方が能よく書かける様やうに思おもひます』と、語かたりながら出だされた捲簾まくらひの灰皿はいざらは、青踏せいふに因よんだ青あい靴足袋くつたひの形かたちした陶器たうき製せいの物ものでした。

若き燕つばめと共同生活きやうどうせいかつ

『妾めかけはこれまでも、小説せうせつを書かいて見みやうとは思おもつて居をましたが、何なんだか小説せうせつを書かく人間にんげんでは無ない様やうな、一しゆ種しゆの氣持きもちがして居をまして、曾かつて一

度も書いた事は有りませんでした。今度の長篇「峠」は、妾にとつては處女作なんですが、何うも筆が思ふ様に進まないもので、當惑して居ます」と語られました。明子女史の處女作小説「峠」と云ひますのは、森田草平の小説で、大評判に爲つた「煤煙」の事實や感想を、根柢から裏切るものだと言ふので、相應に取沙汰されて居るものです。『妾は日本の作家の新しい作物は、餘り拜見いたしませんから、兎や角と突嗟の間に批評がましいことを申す譯には参りません。婦人の作家では田村俊子さんが毎月新作を公表にされますので、其の努力には感心して居ますが、妾とは全然別な人であります爲めか、俊子さんの小説に感心した作は一つも有りませんでした。最初の間は左様でも無かつたのですが、俊子さんも近頃は次第に上手になられて、何だか深さが足りな

い様な、一種の物足り無さを感じます。岩野泡鳴さんと清子さんとは、唯今でも往來して居ますが、清子さんは評論も小説もお書きになるのに、近頃は何も發表なさらない様子です。泡鳴さんは相變らず元氣の様ですが、小説では「放浪」の前を描いた「發展」と題する長篇を、今日まで讀んだ小説の中では、最も強い力で引付けられて拜見しました。田中王堂さんと泡鳴さんの發起で、折々神田の寶亭で火曜會を開かれますので、妾も二三度出席しましたが、與謝野晶子さんには先日もお目にかかりました。お子さんが多勢おありなさるのに、随分多くの文章をお書きになるには、敬服して居ますが、それよりも感心なのは、與謝野晶子さんが、何時見てもお若いことです。妾はもう三十歳になりましたが、一二年前から消化器を病んで居るものですから、此の様

に瘦てしまひました」と、語り去り語り來る間にも、明子さんは顔色一つ動かさず、女としての優しさと犯し難い氣品とが窺はれました。火曜會の歸途に、田中王堂、徳田秋江、瀧田樗蔭の諸家と共に、一臺の自動車に同乗して、諸所方々を歩いた時にも、又新橋の花月に行つて、數名の藝妓を招んで飲食した時にも、明子さんは少しも動じた色を見せず、靜かに周章せず、落着いて居られたさうです。藝妓や女中達に對する態度は、殊に水際立つて宜かつたさうで、徳田秋江さんは非常に感服して、『平塚明子女史は何處へ出しても舞臺に附く女だ』と評して居られました。新しい女の權威でも、平塚雷鳥女史の脈管には、やはり日本女の優しい血汐が流れて居ました。

新々女優下山京子

十八歳で大阪時事新報の婦人記者となり、二十歳で或紳士の寵妾となり、二十一歳で可愛い娘のお母様となり、二十五歳で料理店一葉の女將となり、二十六歳で新しい女優の群に投じた下山京子さんの半生は、さながら極彩色の繪巻物を展開げた様なものでした。静岡縣の小學教師の二女に生れて、豊ならねど乏しいと云ふ程でも無い月日の下に、極めて幸福に娘と爲つて、戀知り初める妙齡から、浮き世の荒浪に揉まれつ揺られつ、今日まで過した二十七年の歲月は、さながら活きた小説を読む様なものでした。今では芝區琴平町二番地は、俗に謂ふ『お妾小路』の一隅に、妾宅造りの意氣な構へ、電話芝一八七七番に訪

へば、湯上りの中形浴衣に、銀杏返しの鬢の香匂ふて、剃つたばかりの眉の跡の青々とした風情に、色香の盛を思はせました。時事新報に勤めた婦人記者時代には、廂髪に紫色の袴を穿いて、薄墨の筆の運に、世相の一端を寫して居たのが、我から辿る數奇の運命に、我と我が生を弄んでの浮氣三昧、とうとう女優の群に交つての今日此頃を、京子さんは何と感じて居られるでせう。『たゞ今、野依秀一さんがお訪ねてして、初めてお目に掛りましたが、噂に聞いた野依さんよりは子供々々して、無邪氣に見えます中にも、いろ／＼と突込で遠慮會釋なく話をされますので、大に周章狼狽してしまひました。一葉を廢業しましてからは、暫く遊んで居ましたが、ジツとして居られない性質ですから、八重菊さんに就いて義太夫を習ひ、世話物よりも時代物の方を、

好んで陰つて居ました。近代劇協會に入つて、初めて舞臺に立ちましたのは昨年十一月、本郷座で「チヨコレート兵隊」と「處女」を演じました時で、妾は處女のクララと、チヨコレート兵隊のルーカに扮しました。それから京都では「出發前半時間」の貴婦人に扮し、大阪では「犬」の娘にも扮しましたが、一番骨が折れましたのも一番氣持の好かつた役も、「處女」のクララでした。演技座で演じた「役者の妻」では、女優明石とサロメに扮しましたが、妾には翻譯物の一風變つた女性の方が、何だか適る様な氣持がします。考へて見ますと、婦人記者から料理屋の女將に化けて、今度は女優に早變り致しましたが、妾の事です。から何時また他の事に手を出すにしても、三四年は舞臺に立つて、暮して見たいと思ひます。手鍋提げて送るのも一生なら、紅白粉つけ

苦勞に、不覺の涙をこぼす様な事も、長い月日の間には有りました』と、勝氣で陽氣で花々しく見える京子さんにも、人知れぬ淋しい月日は流れて居るのでした。『何しろジツとして居られない性分ですから、暇があれば洋服を着て、鐵砲擔いで大宮邊へ参り、此の秋には大手柄をします積で、盛に風船玉を撃つて見たり、又は義太夫を唸つたりして居ます。芝居は七月一日に演伎座で近代劇が開けますので、妾は「金色夜叉」の赤檜満枝と、「死の勝利」のベルタと云ふ、不具者を望んで扮しますが、「金色夜叉」の方は新派劇の型が先入主になつて居ますから、却々演り憎くて困つて居ます。その代り「死の勝利」のベルタでは、大に氣を吐く積りなんですけれど、いろ／＼工風を要しますので、毎日頭を痛めてばかり居ます。それに七月一日は「鳩ボツボ」と云ふカフェ

一を鎌倉で開業します當日なので、身體が二つ有つても足らないと、くだらぬ事に苦勞して見たり、呑氣に見えましても、妾の今日此頃は大汗ダク／＼なんですよ』と、剃つたばかりの眉の跡、銀杏返しの下町風に微笑みながら、京子さんは愛想好く、莞爾に話されました。婦人記者から、お妾から、女將から、新女優から、さて此の後は何うなり行く身の上やら……。

當年の名妓ぼん太

本郷三丁目の交叉點で電車を降りて、大學の方へ向つて小半丁も行きますと、右側に下駄屋とバーの在る間に、路次と云ふは名ばかりの極めて狭い、一人一人が漸と通れるだけの溝板道があります。そこを入

つて十五歩ほど行つた左側の家に、嬌名を一代に馳せた二十年前の名妓ぼん太、今の鹿島清兵衛夫人惠津子さんをお訪ねしました利那に、私はたゞ何となく、華奢風流の夢から現實爆露の悲哀に落ちた人の悲惨さを、苦しくも亦痛ましく感じました。障子は壊れ疊は破れ、見るからにいぶせく取亂した裏長屋住居の中に、驕奢を極めた當年の鹿島清兵衛さんと、艶名を謳はれた當時のぼん太とは、貧しい中にも、極めて幸福な月日を送つて居るのでした。惠津子さんは紺の地味な薄物に白地の帯を締めて、銀杏返し髪の毛一筋も亂れず、中柄の中背で、細面の眉が濃くて、情の深ふ黒い瞳と引締つた口許とに、半生の忍苦が漲つて見えました。『毎日午前中は二三軒へ出稽古いたしましたして、午後三時から夜分の十時頃まで、宅でお稽古を致して居ます。良人が藤

間さんとは別懇の間柄ですから、元來ならば藤間の方を何ですけれど、唯今では水木歌橋さんのお弟子になり、皆様へのお稽古も水木で致して居るので御座います』と話される處へ、浴衣を着て居ても品の良いお人柄の鹿島清兵衛さんが出て來られて、いろ／＼と舞踊の話やら、能樂の話やらをなさいました。『今では一列一體に踊と云つてますけれど、藤間、花柳、西川は芝居の振付から出ました方で、水木、坂東などは御屋敷の狂言師と云つて居たものです。従つて藤間や花柳の振は、荒くて大きいと云ふ方ですが、水木の方は細く、軟りとした流派です。水木の先祖は水木辰之助と申し、芝居の隈取の名人山中平九郎の倅でして、今は歌若、歌橋の二人が流れを汲んで、惠津子の姉弟子には歌榮と云ふ人も居ます』と清兵衛さんがお話の最中に、惠津子さんは『時

間ですから失禮します」とて、出稽古に出て行かれました。清兵衛さんは五十歳ださうですが、瘦せてスラリとしたお人柄で、眼許にも口許にも、當年の若々しさが漲つて居る様に見えました。「私は能樂の笛を稽古し、大阪の名人森田操を師匠として居ますが、鹿島曉鐘で出る事も有りますし、また三木如月と名乗つて出る事もあります。森田の森から三木を取り、三十五年の二月に歸京しましたから、それで如月と號しました。能樂の笛では何と申しましたが、大阪の森田操が日本に唯一人の名人ですが、其の姓を犯すのは僭越ですから、三木と呼んで居ます」と、話は白日にはづみましました。

榮華を偲ぶ舞の袖

舞踊や能樂の話がされた清兵衛さんの眼許にも、出稽古へ出て行かれた惠津子さんの後姿にも、更に貧苦に悩んで居る様な状は無く、反つて華奢風流を極めた當年の面影が、何處やらに色濃く滲つて見えました。荷を擔いだ豆腐屋一人が、自由には出入りの出来ない様な、狭い裏屋に住んで居ても、戀に生き戀に微笑む鹿島さん夫婦の顔には、何處やらに若々しさが漲つて、何となく晴やかに、幸福らしく眺められました。「夫婦と爲つて十九年の間に、十人の子を生みましたが、只今宅に居ますのは二人だけで、他の子は皆養女に遣はしまして、親子四人、兎にも角にも斯うして暮して居ます。お恥しいことですが、上の男の子は出来が悪くて家出をして居ますし、昨年生れた末の子は里子に遣はしますし、十九になる長女は惠津子の姉に當ります新橋玉の

家の養女に爲つて、左り褌を取つて居る様な始末です。二女のくには坪内逍遙博士の養女になり、仕合せな月日の下に、何不自由なく暮して居ますが、もう十六歳になりました」と語る清兵衛さんの態度には、少しも屈托らしい様子がなく、暗い陰影が見えませんでした。「私は十五歳で養家を相續しましたが、その頃は部屋住の身ですから、遊びなど、云ふ事は少しも知らず、明治二十五年の秋、養父が死んでから後、初めて道樂を覺えた様な次第です。遊び盛りは明治二十六年から三十年まで、二十八歳から三十二歳までの五年間に過ぎませんでした。だが、只今では何でも無い豪遊でも、其の頃のことですから、何かと大袈裟に評判されたのでせう。斯う申しては何ですが、今の方は同じ遊興をするにしても、他の者を遊ばせると云ふよりは、自分が遊ぶと

云ふ方ですが、昔の人の遊興振は、他の者を遊ばせて、其の興がるのを見て、自分も樂しむと云つた風でした。従つて今の方々の遊興は、何も彼も自分が本位でして、少しも餘裕がありませんが、昔の大盡遊びは、何と云つても寛濶として、藝事を本位にして居ました」と清兵衛さんの思ひ出は、二十年の昔に飛んで、その眼は燃える様にかがやきました。「本郷座の傍から此所へ移轉しまして、五年になりますが、相變らずの貧乏で、今では貧乏も苦にならず、世間を外にして暮して居ますよ」と鹿島清兵衛さんは呑氣らしく微笑みました。十人の子を生でも、不如意勝に暮して居ても、鹿島さん夫婦は何時までもお若くて、藝事に没頭して居られるところに、他人の窺ひ知らぬ幸福があります。五六歳と八九歳の嬢ちゃん二人、洗ひ晒した浴衣を着て戯

れて居る様も、更に哀れには見えませんでした。

謎の島村抱月夫人

西大久保巡査派出所の戸別簿には、三百十五番地の戸主として「島村瀧太郎」の名が記載してありますけれど、實際の居住者は妻いち(一)長女はる(九)二女さみ(六)の外に、長男震也(五)二男秋人(十)及び三女とし(五)の六人に爲つて居ます。六月三十日午後四時、十中の八九は面會を謝絶されるでせうと覺悟して、突然お訪ねいたしますと、玄關には中形の浴衣を着た十八九の美しい娘さんが居て、ものゝ五分間も臺所の方へ入つて居られました。が、やがて「取亂して居ますから、端近ですが茲で失禮します」とて、白地に薄く格子縞を織出した浴衣を着て、

髪を無造作に束ねた婦人が、苦笑を浮かべながら出て來られました。其の傍には久留米緋を着た震也さんや、秋人さん等が、何の苦勞も無さ相に遊んで居られ、三女のとし子さんは、見馴れぬ私の顔と、お母さんの顔とを七分三分に眺めながら、メリンス友染の浴衣に紅の帯の可愛い氣に、お母さんのお乳を呑み初めました。取次に出られた八九の娘さんは、長女のお春さんでせう、色白の小柄で眉や眼許は父君島村抱月さんに似たとは思か瓜二つの顔を、チヨイ／＼襖の蔭から出しては、不安さうに記者の姿を眺めて居られました。格子縞浴衣を着た婦人こそは島村抱月夫人で、世間の噂では醜婦とのことでしたが、色こそ稍淺黒けれ、決して十人並劣つた容色の方ではなく、苦勞を何とも思はない利かぬ氣らしい、如何にも糟糠の妻であり、慈悲深い母